

Title	NEWSLETTER 聖学院大学総合研究所 : Vol.21, No.2, 2011
Author(s)	聖学院大学総合研究所
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.2 : 0-33
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3138
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

NEWSLETTER

聖学院大学総合研究所

Seigakuin University
General Research Institute

Vol. 21, No. 2, 2011

[巻頭言]

- 1 高橋義文
現実主義の必要を思う

[研究ノート]

- 2 高 萬松
日韓条約批准反対運動の中のキリスト者たち
- 6 齊藤 伸
高等学校学習指導要領における「目標」の比較考察

[報 告]

- 9 田澤 薫
村山順吉氏報告「『子どもの領分』をめぐる」
- 12 田澤 薫
金谷京子氏報告「子どもの言い訳にあらわれるもの」
- 15 スピリチュアルケア研究講演会報告「スピリチュアル・コミュニケーション」

[共同研究報告]

- 17 ニーバーの愛と正義の弁証法的理解および世界共同体論
- 17 韓国の神学について—モルトマンとの関わりから—
- 18 ドイツ基本法(憲法)の成立と展開

[教員活動報告書] (2010年度)

- 20 森田美千代、藤原淳賀、藤掛 明、ディーン・サザデン、竹渕香織、
高 萬松、松本 周、ジャスティン・ナイティンゲール、木村美里

総合研究所News

- 29 総合研究所ファカルティ・ミーティング報告
- 30 スピリチュアルケア研究講演会「スピリチュアル・コミュニケーション」

《 総合研究所の活動 2011年6月1日から7月31日 》

共同研究	回数	開催日	研究発表者	主 題	人数
臨床死生学研究	第1回	7月9日	堀 肇 (鶴瀬恵みキリスト教会牧師)	キリスト教の死生観	46名
児童学研究	第2回	6月22日	金谷京子 (聖学院大学教授)	子どもの言い訳にあらわれるもの	15名
牧会心理研究 (第一グループ)	第1回	6月2日	藤掛 明 (聖学院大学大学院准教授)	—	6名
牧会心理研究 (第二グループ)	第1回	6月24日	藤掛 明 (聖学院大学大学院准教授)	—	7名
東アジアにおける憲法基盤形成の比較研究	第1回	6月13日	栗城 壽夫 (聖学院大学大学院教授)	ドイツ基本法(憲法)の成立と展開	17名
ニーバー研究	第1回	6月6日	千葉 真 (国際基督教大学教授)	ニーバーの愛と正義の弁証法的理解、終末論、世界共同体論	35名
日韓教会史研究	第1回	6月9日	洛 雲海 (長老会神学大学研究員)	韓国の神学について——モルトマンとの関わりから	24名

講座・シンポジウム	回数	日時	研究発表者	主題	出席人数
小学校英語指導法セミナー	第1回	6月17日	ブライアン・バード、藤原真知子 (聖学院大学総合研究所 特任講師)	「こうやって教えよう小学校英語」現場からの提案	33名
スピリチュアル・ケア講演会		6月3日	林 章敏 (聖路加国際病院緩和ケア科)	スピリチュアル・コミュニケーション～生きる支え～	128名
カウンセリングシンポジウム		7月1日	平山正実 (聖学院大学大学院教授) 窪寺俊之 (聖学院大学大学院教授) 藤掛明 (聖学院大学大学院准教授)	いかに心の世界を学ぶか	125名

人間福祉スーパービジョンセンター	スーパーバイザー		実施日	人数
2011年度グループ・スーパービジョン	埼玉県	柏木昭 (聖学院総合研究所名誉教授)	6/27、6/10、7/8	9名
	石川県			10名
個別スーパービジョン		柏木昭 (聖学院総合研究所名誉教授)	6/5、6/25、7/4	3名
		田村綾子 (聖学院大学准教授)	6/27	1名
6月29日		スーパービジョンセンター委員会 活動報告、10/15ピア・スーパービジョンについて、書籍製作について		6名

カウンセリング研究センター心理相談	カウンセラー	実施日(月曜日)	人数
赤坂グリーフケア・ルーム	藤掛 明 (聖学院大学大学院准教授)	6/6、6/13、6/20、6/27、7/4、7/11、7/25	8名
	村上純子 (聖学院大学非常勤講師、カウンセラー)	6/6、6/13、6/20、7/26	5名

聖学院キッズ英語	講 師	実施日	人数
幼稚園クラス	ブライアン・バード (聖学院大学総合研究所特任講師)、 藤原真知子 (同)、ジャスティン・ナイティンゲル (同)、 西嶋小百合 (聖学院大学総合研究所委託講師)、山根真由美 (同)	6/6、6/7、6/13、6/14、6/20、6/27、6/28、7/4	36名
小学生クラス		6/1、6/7、6/8、6/10、6/14、6/15、6/17、6/21、6/22、6/24、6/28、6/29、7/1、7/5、7/6、7/8、7/12	69名

Faculty Meeting	
6月1日	東日本大震災をどう捉えるか
6月8日	洛雲海 長老会神学大学校講師「韓国のキリスト教(長老派)について」
7月6日	長老会神学校との共同研究について、日韓神学者会議について
7月13日	東日本大震災をどう捉えるか
7月20日	東日本大震災をどう捉えるか
7月27日	専任研究職員の夏季研究計画について

長老会神学大学校との協議	
6月23日～25日	1)日韓教会交流(関係)史研究、2)第2回日韓神学者会議、3)2012年聖学院大学で開催するシンポジウムの主題について

現実主義の必要を思う

このところ〔原稿を書いている7月はじめ〕、菅政権の末期的症状がかまびすしく伝えられている。そうした情報に接しながら、ふと、この政権が誕生した一年余り前、菅直人首相が現実主義者（リアリスト）であることを、メディアがおおむね好意的に報じていたことを思い出した。それは、実現可能性を示しえないままに夢を語った鳩山前首相への失望の反動でもあったであろう。

ところが、いま、現実主義（リアリズム）にふれる議論はほとんどみられない。それどころか、振り子は反対方向に大きく振れ、ヴィジョンや国家観や将来像の必要を訴える声がしきりである。危機のなかで迷走を続けるかに見える「現実主義者」菅首相への不信のせいであろうか。

しかし、現実的思考を無視してヴィジョンを語ることは必ずしも好ましいことではない。場合によっては「あれか、これか」を迫る極端な思想も生じかねないからである。事実、そのような現象がかなり見られるようになってはいまいか。それゆえ、このようなときに、いや、このようなときだからこそ、あえて、現実主義と現実主義的な見方とその意義についてあらためて考えてみる必要もあるのではないだろうか。

現実主義とりわけ政治的現実主義には長い歴史があるが、ここでは、第二次世界大戦後しばらくの時期のアメリカにおいて一定の歴史的役割を果たした現実主義に目を止めてみよう。それは、外交政策をめぐるG・ケナン（外交官）、H・モーゲンソー（政治学者）、D・アチスン（政治家）、W・リップマン（ジャーナリスト）、R・ニーバー（神学者）らの思想と活動である。世代を同じくするこれらの人々は、考え方においてときに決定的とも言えるほどの違いを見せながらも、それぞれの見解の濃淡を深く交流させて、この時期、「^{コヒアレント}一貫したまとまりとしての現実主義」（J. H. Rosenthal, *Righteous Realists*, 1991）を形成し、現実の政治に、あるときは背後の思惟として、あるときは厳しい批判や具体的政策提言をもって多大な影響を与えた。そしてそれは当時の世論の一定の支持を得たのである。

そうした現実主義を、ニーバーは、「^{ディスポジション}確立されている規範に抵抗するすべての要素とりわけ利己心と権力の要素を考慮に入れる傾向」向」（“Augustine’s Political Realism,” 1953）と定義した。形而上学的に厳密な表現ではなく、人間の経験と社会の現実^{ディスポジション}に即した、人間自己の罪性への深い洞察を前提としたものである。この見方は他の現実主義者たちにも共通し、アメリカの伝統に内在する楽観主義的人間観を徹底して排する姿勢ともなった。もっとも、この姿勢が、現実埋没、status quo、悲観主義に傾斜しがちであることは言うまでもない。実際、かれらにそのような批判が向けられることも少なくなかった。

それゆえニーバーは、人間には同時にもう一つの側面すなわち創造的側面があることも強調した。人間は、破壊性と創造性の弁証法のなかにあるのである。しかしそれだけではない。ニーバーには、その人間の営みを外からとらえる究極的超越的視点を保持するというもう一つの次元があった。それは、モーゲンソーがニーバーに学んだ、「永遠の相」からアメリカを見る視点である。この超越的な視点こそ、かれらの現実主義を、暴走や墮落からまもり、より高い次元へと牽引し、成熟した姿に鍛え上げる重要な手立てとなったのである。

この見方は、他の現実主義者たちにおいても何らかの形で共有され、そのゆえに、かれらの現実主義が、現実主義がしばしば行き着く、「パワー・ポリティクス」への信奉に安易に結びつくことはなかった。むしろ、それを「レスポンシブル・パワー」の形態へと改変することに向かったのである。

大震災や原発事故のみならず山積する内外の諸問題を前に、極端に言えば、なすすべを知らず立ちつくしているかにさえ見えるこの国にあって、いま必要なのは、ケナンらに例を見る、成熟した深みのある現実主義的思考ではないだろうか。そしてそれは、そこに生きるわれわれ個人についても同様ではないかと思う。

日韓条約批准反対運動の中のキリスト者たち —1965年救国祈祷会を中心に—

高 萬松

1 はじめに

本研究所とソウルの長老会神学大学校は「日韓関係100年（1910-2010）と日韓キリスト教会の交流」に関する日韓共同研究を実施している。本研究ノートはその研究成果の一部として、1965年前後の両国教会における日韓条約を巡る関わりについて分析したものである。

1965年6月22日に日韓基本条約が東京で仮調印されると、韓国では国会での批准を阻止する反対運動が展開された。その反対運動には反日感情が根幹を成していた。このような社会的雰囲気があったにもかかわらず、その2年後、1967年に日韓のキリストの教会が宣教協約を結ぶようになった。わずか2年の前には、韓国の教会が力を合わせて反日の隊列に加わっていたが、両国の教会の関係がそのような急転したきっかけは何であったのだろうか。二つが考えられる。

一つは、韓国側での「救国祈祷会」であり、もう一つは日本基督教団総会議長の訪韓である。前者は1965年7月と8月に全国的に展開されていた祈祷会である。この祈祷会の中で「日本のキリスト者に送るメッセージ」が採択され、韓国のキリスト者たちの志が日本の教会に伝えられたと思われる。そして同年9月に日本から韓国基督教長老教会創立第50周年記念式に日本基督教団総会議長が招待されており、その機会を通して相互理解が深められたと思われる。（特に、「日本のキリスト者に送るメッセージ」は日本の教会資料には見あたらない。ここで取り上げるのは意味があるであろう）。

2 状況

日韓会談は国交を樹立するために1951年にはじまったが、中断を繰り返した。1961年以降の軍事政権は日

韓会談に強い意欲を示し、1961年12月には日韓首脳会談が開かれた。1964年に入ると日韓会談に対するアメリカの圧力も増して、日韓両国のあいだの動きが活発になった¹。5月調印の噂もあって、1964年3月6日には野党連合勢力は社会、宗教、文化などの各界の代表知識人とともに対日屈辱外交反対闘争委員会を結成し、「会談の即刻中止」を要求した²。そのような野党や知識人の動きに、実際的に行動勢力として学生たちが合流した。1964年3月24日に学生5000名がデモを繰り広げ、1960年の「四・一九学生運動」以後、最大の運動となった³。1964年6月3日にはソウル一帯に非常戒厳令が宣布された。このため反対運動の団体も解散されたが、1965年2月20日に日韓基本条約が仮調印されると、これを前後にして反対運動は大きく拡大した⁴。

さらに日韓条約が1965年6月22日に東京で調印されると、韓国国内では批准反対運動が始まった。「キリスト者として祖国の運命に対して傍観することはできない」⁵という趣旨で、牧師たちは救国祈祷会を開き、それは全国的に拡大された。1965年を戦後史における反日運動の頂点と見る研究者もいるほどである⁶。その反日運動には反政府運動の性格も含まれていて、池明観はデモ隊の民衆を見、その民衆の抵抗の力が「韓国の民主化運動における勝利に連なること」⁷となったと見なす。しかしわれわれは民衆の中のキリスト者たちに注目して見たい。彼らはデモではなく、「危機の克服は神による」⁸という信仰を以て「救国祈祷会」を開催したのである。その中で「教職者救国委員会の声明」と「日本のキリスト者に」送るメッセージが発表されたので、これらの文書がどういう意味を持っているか考察して見たい。

3 「教職者救国委員会」の声明

1965年9月18日付の『教団新報』は、日韓条約をめぐる韓国教会牧師たちの「教職者救国委員会の声明」⁹を抄訳し掲載している。それは1965年7月11日に韓景職他教職者240名の連署で発表されたものである。以下、その声明の概略を見よう。

一言で声明は、キリスト者が歴史形成に参与すべく当為性を力説している。三箇所を引用しよう。まず、歴史形成に参与する意思是預言者と使徒たちに見られるということを前提で、「第一、キリスト者として、われわれは祖国の運命に無関心ではありえない」と宣言している。日韓両国の外交関係の回復は韓国の歴史にとって重大な事件であるので、キリスト者が「聖霊の導きにより自由な市民権を行使し、キリスト者の神聖な義務を遂行することは当然なこと」と理解されている。「第二、われわれキリスト者は個人においても国家においても、真実な和解の精神によって共通の利益を見いだすべきであると主張する。真の和解のためには、過去に犯されたあやまちの真の悔い改めと新しい歴史を形成するための善意に基づく奉仕と協力の約束が何よりもまず行なわれねばならない」、と述べられている。真に和解するためには悔い改めが必要だという主張はキリスト教の精神である。真の和解に至らない理由が次のように記されている。「不幸にして日本は、ただ国家の利益を促進する国際的経済組織を強化するためにのみ熱心であった。日本のこの態度は韓国民の心に敵意を生じ両国民の間の憎悪を深めただけであった」。そして第4番目に戦いの精神とも言うべき主張が見られる。すなわち、「第四、われわれキリスト者は、あらゆる形の専制主義、不正、破壊と戦う。われわれは経済、文化、道徳、政治その他あらゆる分野における不純な外的影響への服従とその征服者に対して戦う。われわれは、聖霊の導きと祈りと務めとによって祖国のために働くことを誓う。1965年七月一日韓景職他教職者二四〇名」¹⁰

以上のような内容の声明を『教団新報』に載せた編集者は、このような意見が当時韓国教会の一部の意見であると、次のように注記している。「以上は韓国教会の有志による日韓条約に関する声明書の要旨である。韓国教会全体の意見ではないが、同条約についての韓国の人々の気持ちを知る上にたいせつであると思う」¹¹。しかしそのような見方は当時の韓国教会の実情を正しく把握していない。というのは、連帯署名者の代表は韓景職となっているが、実際にその声明の起草者は大韓基督教長老会所属の金在俊牧師であったからである¹²。1950年代は両牧師の所属していた両教団がお互いに牽制していたが、その救国祈祷会における一致と協力は、その声明が教派を越えての作業であったということが裏付けられている。

金景在は1965年7月に「日韓屈辱外交反対大会」が永楽教会で開かれた意味を二つあげている¹³。一つは、教会が1919年「三・一独立運動」以降、45年ぶりに初めて民族の問題に取り込もうとしたということ。もう一つは、韓景職、金在俊などキリスト教指導者たちが教派を越えて一致していたということである。金景在の見方が妥当だとすれば、その声明書の意見は、当時韓国教会の一部のものではなく、韓国教会の全体の意見と受けとめられるであろう。

4 日韓条約批准反対運動

1965年六月に日韓条約が調印された後、韓国の教会は条約批准反対に転じている。集会は「国家のための祈祷会」と名付けられて、当時の有力牧師韓景職が牧会していた大韓イエス教長老会永楽教会で開かれた。大韓イエス教長老会の機関紙『韓国基督公報』の1966年7月と8月の紙面は日韓条約批准反対運動に関する記事で満ちている。新聞によれば1965年7月5日に5000人が参加している。その頃の指導者たちの対日本観をこの場で見よう。新聞によれば金在俊牧師は日韓会談を次のように解釈している。すなわち、「金博士は日本

の侵略政策は彼らの祖先から一貫した政策である
ということを歴史的に見せ」、「現在もその政策を
捨てていない」¹⁴、と述べている。韓景職の見方は
どうであろうか。彼の1965年6月27日の説教の一
部を引用しよう。「ちょっと前に日韓条約が締結
されました。…日本は過去36年間に渡って我が民
族と国家に対して言い切れない罪を犯しましたが、
今日に至るまで懺悔と誤る姿勢を見ることが
できません。朝鮮戦争を契機に日本の経済が拡大
し、日本の経済が復興されましたが、今日国交を
正常化するに当たって、少しも悪かったという態
度を見ることができず、むしろ自分たちの利権の
み、漁業権のみを得ようとする、…このような姿
勢を見る時、我が国民の感情を激昂させたことは
事実だと思います」¹⁵、と語った。二回目の救国祈
祷会は7月11日に開かれ、7000人が参加してい
る。新聞記事には各教派の信徒たちが参加し、朴
大統領宛に、日韓交渉が現在のままでは我が国家
の大地軸を動かす結果となるので中断してくださ
いという内容の書簡を送った。

8月1日の集会では、主張がより鮮明になって
いる。すなわち、「韓・日国交正常化は賛同するが、
屈辱的外交による韓・日協定批准は反対し、日本
は過去の罪を懺悔して〔会談に〕誠実な態度で臨
むべきである」と主張した¹⁶。興味深いことは、
この日に池明観が「条約解説を通して、日本の経
済的侵略の道具しかならないこの条約は反対すべ
き」¹⁷だと語った。日本に対する前述の3人の見方
は殆ど一致していると考えられる。後述の「日本
のキリスト者に送る」メッセージがその日に採択
されたのである。

5 日本のキリスト者に送るメッセージ

2500人が参加した8月1日の集会で「日本のキ
リスト者に」送るメッセージが採択されている¹⁸。
それが日本のどの機関に送ったかは不明である
が、その場では、「日本の佐藤首相に」そして「ア
メリカ大統領に」送るものも採択されている。日

本のキリスト者に送るメッセージがそれらと異
なっている点は、信仰に基づいているという点で
ある。冒頭で「主において一つの肢体となっている
皆さまの上に父なる神と主イエス・キリストの
祝福」を祈り、最後の段落で「お願いします。日
本の同じ信者各位も、われわれの苦しみをご理解
した上で、貴国内での対韓〔国〕の姿勢がもっと
良い方向に転換される必要があると感じました
ら、善意が広げられるようご協力して下さい、
われわれに大きな激励となりと存じます」と締め
くくっている。以下にその内容を要約してみよう。

まず、日韓条約の批准における前提条件が挙げ
られている。メッセージは「日韓両国民の恒久な
交わり」を樹立するために権力や理解を超えた「論
理的前提条件」が必要だと冒頭で述べている。そ
して、韓国人は日本に対して「怨恨」があると大
胆に言い表している。それは日韓併合により、日
本が韓国人に植え付けた「怨恨」であり、それは
日本のキリスト者が想像できないほどのものだと
日本のキリスト者に訴えている。そして、このま
ま批准が強行されると、「両国民間の親善よりむ
しろ葛藤と敵意が激化されるのは明白である」と
いう憂慮を示し、「昔からの怨恨を一掃し、真の
善意と協力が交流できる」ような関係を求めてい
る。最後に、「日本に〔私たちと〕同じ信仰を持
つ皆さまも私たちの苦しみを諒解し、貴国内での
対韓の姿勢がさらに良い方向に転換されることに
協力して下されば私たちに大きな激励になると
思われます。貴教会及び信徒の皆さまの上に三位
一体の神様からの祝福を祈願致します。1965年8
月1日国家のためのキリスト教職者一同」と締め
くくられている¹⁹。以上のような内容であったが、
文体から日本のキリスト者との親密感を感じられ
ない。それは、両国の教会がまだ和解関係に入っ
ていなかったからであろう。

6 批准反対運動の影響

1965年の反日運動の最中、韓国のキリスト者が

批准反対運動を展開した理由はこうである。「今度の日韓条約の内容を見ると、われわれは韓国に対する日本の態度が強者が弱者を扱う圧力、自国の利権樹立のための布石などを重んじている『新植民政策』の露骨的表現に過ぎないと看破しました。このまま批准が強行されると、両国民間の親善よりむしろ葛藤と敵意が激化されるのは明白です」²⁰。そのような悲劇が起こらないために、批准を拒否していると言明している。つまり、キリスト者たちは単純に「反日運動」を展開したのではなく「日韓の真の交わりのための精神的・倫理的布石」²¹を築くために戦ったと考えられる。われわれは、韓国キリスト者におけるそのような戦いの精神が日本の教会に伝えられたと見なしたい。というのは、次のような大村議長の発言は韓国キリスト者たちの抵抗運動なしには生まれなかったからである。同年〔1965年〕9月にソウルで開かれた大韓基督教長老会第五十回総会に参席した大村日本基督教団総会議長は次のように言う。

今春二月に、大韓基督教長老教会第五十回総会への招請をうけ、教団としては議長を代表として送ることを、すでにきめていた。ところが、その後、日韓条約の成立、その批准をめぐる、韓国の中に、とくにキリスト教会の間に、有力な反対運動のあることを知った。そしてその奥にあるものは、過去の日本が犯した残酷な政治に対する割り切れない思い、深い心の問題であることを知った。今まで日本の教会は、日韓問題の底にある問題に、十分責任をかんじていなかったし、韓国教会との和解や交わりに対しても、努力しなかった²²。

1965年の韓国民衆の抵抗の力が韓国の民主化運動に勝利をもたらしたとする評価が正しいならば²³、韓国のキリスト者たちの「救国祈祷」運動の力は日本の教会を動かしたと考えられる。それは、日本のキリスト者たちに、過去をみる謙虚さと、

韓国のキリスト者たちを隣人として見ることのできる視野をあたえたのではないかと考えられる。

- 1 「状況」については池明観氏の著書に多くを負っている。池明観『韓国現代史と教会史』新教出版社、1975年、46頁。
- 2 同上書、47-48頁。
- 3 同上書、48頁。約40名が重軽傷、150名が連行された。
- 4 同上書、49頁。在日朝鮮人の法的地位合意要綱仮調印（4月3日）。
- 5 『基督公報』第789号、1965.7.10、1頁〔「기독교공보」〕。韓国基督教報社『韓国基督教報縮刷版』第2巻、1984年を参照されたい。
- 6 池明観、前掲書、52頁。
- 7 池明観『韓国と韓国人』アドニス書房、2004年、142頁。
- 8 『基督公報』第793号、1965.8.14、3頁。
- 9 『教団新報』第3464号、1965.9.18、4頁。cf.日本聖書神学校編『教団新報一九四一～二〇〇七』日本聖書神学校、2007年、(DVD)。
- 10 同上書。
- 11 同上書。
- 12 金景在『垣を越えて』ユトピア、2005年、47頁〔김경재「울타리를넘어서」유평아〕。
- 13 同上書。
- 14 『基督公報』第789号、1965.7.10、1頁。
- 15 『韓景職牧師説教全集 八』韓景職牧師記念事業会、2009年、365-366頁〔「한경직목사설교전집 8」、한경직목사기념사업회〕。
- 16 『基督公報』第793号、1965.8.7、1頁。
- 17 同上書。
- 18 同上書、二頁。
- 19 同上書。
- 20 同上書。
- 21 同上書。
- 22 『教団新報』第3464号、1965.9.18、3頁（傍点、筆者）。
- 23 池明観、前掲書、142頁。

（こう・まんそん 聖学院大学総合研究所助教）

高等学校学習指導要領における「目標」の比較考察 ー外国語教育における「コミュニケーション」と「他者」をめぐるー

齊藤 伸

1. はじめに

平成22年に発表された新たな学習指導要領（以下、「要領」と呼ぶ）によって、わが国における英語教育が大きく変わろうとしている。このたびの改訂によって、これまで昭和53年以来、我々にとって馴染みの深い科目であった「英語Ⅰ・Ⅱ」、「リーディング」そして「ライティング」といった科目が姿を消そうとしている。筆者は教育者として、また被教育者として現行の要領に関わってきたために、真の意味でこれらの科目に慣れ親しんでいる。そんな筆者にとっては、この変革がいったい何を意味しているのかを、単なる「受容的」立場だけによってではなく、それを真の意味で再考してみる必要が感じられた。というのも、この改訂によってあえて現行の科目名を改めるということ、それが何を意味しているのか、そして英語教育全体が、どこへ向かおうとしているのかを明確する必要性が感じられたし、またその理念自体が明確にされていなければ、この変革は単なる形式的なものに留まるだろうからである。そして予め述べておくが、筆者はこの度の改定を単純に迎合すべきであるとは考えてはいない（当然のことながら、その全てを否定しようとするのでも決していない）。その理由は後に述べることになるが、限られた紙面においては全てを明瞭にすることは困難であると思われる。そのため本稿においては、それが孕む可能的な問題点を指摘するに留まるであろう。そして本稿は筆者にとっての新たな研究への手がかりとなるものと考えている。そこでここでは、高等学校の外国語科（英語）の新要領と現行要領が説くそれぞれの「目標」の比較からそれらを再考したい。

2. 外国語教育の目標について

まずは現行要領と新要領とが説く高等学校外国語科の目標をそれぞれ明らかにしておきたい。

現要領 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

新要領 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。（下線は共に筆者による）

（「高等学校学習指導要領」文部科学省<<http://www.mext.go.jp/>>）

両要領における目標は、ほとんどの文言において一致しており、それぞれの要領が説く目標を前半と後半とに分けてみると、前半部分においては完全に一致しており、後半部分も若干の変更が見られるだけである。そのため両要領が説く外国語教育の主要な目標は、①「コミュニケーションを図ろうとする態度」を育成すること、②「コミュニケーション能力」を養うことの二つで一致している。すると一見したところ、此度の改訂は理念的にはほとんど変化はない、と思われるであろう。だが、再び戻って下線を引いて示した箇所を注視してみよう。両下線部分を見比べてみると、そこには僅かではあるが、しかし確かに異なる性質が現れている。現行の目標では育成すべき理解力の対象が、「相手の意向」と言われていたもの

が、新たに「考え」と言い換えられている。文部科学省による新要領の解説ⁱでは、この文言の変更にⁱⁱ関して特別な注解はなされていないが、「意向」と「考え」が同義語であると解すれば、「相手」すなわち「他者」が脱略されたことになる。この脱略を単なる文言上の問題として、何ら本質的な変化はないと捉えて良いのであろうか。さしあたりここでは結論を急ぐことなく、次の考察に目を転じてみよう。

3. 科目の目標について

本稿の冒頭で、英語科の科目名が変更になることを指摘したが、次に新たに導入される科目と、現行の科目について比較考察してみたい。さきに馴染み深い科目と呼んだ「英語Ⅰ」をはじめとする英語科の科目は、いわば高等学校の英語教育そのものを代表する一般的なシンボルであった。それがこの度の改訂によって、「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」という科目名に変更される。否、変更されるのではなく、上述の科目が廃止され、新たな科目としての「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ」が導入される、と述べるほうが適切であろう。そのためここでもまた、現行の「英語Ⅰ」と新設の「コミュニケーション英語Ⅰ」の「目標」から比較してみたい。それぞれの科目目標は、次のように規定されている。

英語Ⅰ

日常的な話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

コミュニケーション英語Ⅰ

英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝え

たりする基礎的な能力を養う。

(下線はすべて筆者による)

ここでもまた下線を用いて強調したが、現行科目の目標と新設科目のそれでは、文言上の比較ではほぼ一致する。しかし読者はすぐにそれぞれ下線で示した箇所の順序が逆転していることに気づくであろう。前者では「基礎的な能力を養う」ことが先行し、それと共に「態度を育てる」と言われているのに対して、後者では、第一に「態度を育成する」と主張されている。この逆転が意味することは、明らかな教育的意図の中心点の移行であり、現行の科目よりも、コミュニケーション自体に対する積極性や主体性を強調した教育への移行を意味している。そのため次のような解説が付されている。「コミュニケーションへの積極的な態度は、国際化が進展する中であって、異なる文化をもつ人々を理解し、自分を表現することを通して、異なる文化をもつ人々と協調して生きていく態度に発展していくものである」ⁱⁱⁱと。確かにここで言われているように、グローバル化が加速する現代世界にあっては、異文化に属する人間との共生が求められる。だが、我々はここで予め前提されている内容を次のように問い直さねばならない。すなわち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度(=主体性)が、本当の意味で自己とは異なる文化をもつ存在、すなわち異質な存在を理解する能力へと発展すると言い得るのか、と。当然のことながら、それを可能にするためには相互間での何らかのコミュニケーションが前提される。しかしながら「協調して生きていく態度」とは、「主体性」からのみ生じるものであるのか。むしろ、その目的を確実に果たすためには、自己の主体性と同程度か、またはそれ以上の受容的態度をもつことによってこそ、それが可能ではないだろうか。こうした理解は、文科省による『解説』においても含意的に述べられてはいるものの、明らかにそれよりも主体性が強調されて

いると言わざるを得ない。そのためコミュニケーションを図ろうとするだけではなく、それを成功させようとする態度を育成するためには、自己とは異質な存在を受容する態度もまた、同時に育成されねばならないであろう。

4. おわりに

ここまで高等学校の外国語科全体の目標と、その主要科目である「英語Ⅰ」、そして今後それに代わって主要科目となるであろう「コミュニケーション英語Ⅰ」の目標を比較考察してきた。そこで筆者は外国語教育の目標から「相手」つまり「他者」の姿が無くなったこと、そして主体性の強調によって自らが発信する態度や技能が、受容することのそれらよりも明らかに優先されていることを指摘した。というのも、これらが単なる偶然によるものでも、または単なる表現上の問題でもないように思われたからである。第一の「他者」の脱略は、現代の人間における根底的な思考様式、つまりは潜在的にも顕在的にも我々を支配している「世界観」と一致する。すなわち、それが「他者」を排斥することによって、「自己」そして「主体性」を世界の中心に据える独我的世界観をいっそう助長させる危険を孕んでいるように筆者には思われた。たとえば、金子晴勇は主体や自我の強調が招く意識状態を次のように論じる。「自我の主張は当然のことながら、＜他者＞を押しのけ、抹殺するか、それを認めたとしても、他者の＜独自性＞と＜異他性＞を撥無^{はつむ}し、他者を＜他なる自我＞として立てても自我を共通内容とすることによって＜平均化＞している」と^{iv}。

こうした主張は、まさに我々が要領の比較考察を通じて目の当たりにした構造と一致する。そのため我々は、過度な主体的態度の強調は、他者の排斥を引き起こし得ることに留意しなければならない。当然のことながら、コミュニケーションは単純に一方的な自己からの発信だけによって成立するものではないし、語学の一般的な四技能、「読

む」、「聴く」、「書く」、「話す」はすべてが一なる能力である。本当の意味での「相互理解」がコミュニケーションの目的であるとするならば、それは決して自己の強調によっては達せられ得ないことは明らかである。なぜなら他者が語る言葉は、他者の言葉に従ってのみ理解されなければならないから。したがって他者自身、つまり「他我」を理解することなしには他者の言葉を「理解」することもできないであろう。

そうすると、「コミュニケーション」という日本人にとって（ことによると、日本人だけに留まらないかもしれないが）、魅惑的な言葉によって覆い隠されているにもかかわらず、このようにあまり省みられることがない潜在的な問題が存在するのである。そのため筆者は今後の研究において、そうした事柄に光を当てようと考えている。すなわち、私にとっての他者とはなにか、我々はいかにして他者を理解するのか、そして他者の「理解」とはなにか、そして本来あるべき自己と他者との関係とはいかなるものか、そうした問題が再び問われて良いはずであるし、また問われねばならないであろう。

i 『高等学校学習指導要領解説、外国語・英語』開隆堂出版、2010年、8頁。

ii この目標における後半部分に関しては、さらに次のように補足して解説がなされている。「聞いたり読んだりして得た情報や考えなどを的確に理解したり、自分が伝えたい情報や考えなどを受け手に対して適切に伝えたりする基礎的な能力を養うことを意味する」。『高等学校学習指導要領解説』13頁。

iii 『高等学校学習指導要領解説』8頁。

iv 金子晴勇『マックス・シェーラーの人間学』創文社、1995年、99頁。

（さいとう・しん 聖学院大学総合研究所特任研究員）

児童における〈総合人間学〉の試み 研究 村山順吉氏報告「『子供の領分』をめぐって」

田澤 薫

2011年1月7日、「児童における〈総合人間学〉の試み」研究会の例会が開催された。本学児童学科長の村山順吉氏が、「『子供の領分』をめぐって」と題して、ドビュッシー (Debussy, (Achille) Claude 1862-1918) 作曲のピアノ曲「子供の領分」について「子供」という切り口から読み解いたご報告をくださった。

チャペルを会場としたレクチャーコンサート形式の報告は参加者を大いに楽しませ、ピアノ演奏を交えた説明手法に、児童学における楽曲研究の今後の新たな展開が期待された。また報告の最後には、ピアノロールで録音されたドビュッシー自身による「子供の領分」の演奏を聴き味わった。口頭による報告の概要は以下の通りである。

ドビュッシーの「子供の領分」の原題は、英語のChildren's Cornerであり、これを「子供の領分」と訳出した人物とその訳出経緯については調べが分からなかった。ドビュッシー作品が日本に紹介されたのは比較的早く、山田耕筰らが積極的に取り入れて演奏しており交響詩「海」なども発表されて何年か後には日本での初演をしているが、「子供の領分」の日本初演については分からない。

ただし「子供の領分」と訳出されたこの曲が疑問を持たれずに演奏されている現実をふまえ、この曲の背景を探ってみることにした。

楽譜は、フランスのデュラン社 (Durand) から出版されたが、デュランの原典版も非常に間違いが多いことで知られている。研究会での配布資料は、多くのピアノ曲の原典版で知られているヘンレ社 (Henle) の版による。他に原典版にはベレンライター社 (Barenreiter) の版もあるが、ベレンライター版とヘンレ版を比較しても音の入るタイミングで異なる箇所がある。オーソドックスな演奏を聴いた中で、聴きなれた弾き方に近い楽

譜を探したところ、今回はヘンレ版であった。こうした事情を踏まえ、日本でも4種類ぐらいの楽譜が刊行されている。最も古いのは安川加寿子版 (1960年、音楽之友社) 次いで山崎孝版 (音楽之友社)、その後、田中希代子版も全音から出版された。10年ぐらい前には新しく中井正子版 (ショパン) が出た。

作者のドビュッシーは、大変な影響力のあった作曲家であり、「月の光」のような分かりやすい曲ばかりでなく、非常に分かりにくい難曲も多数発表し音楽の世界に新しい風を吹かせた。1862年8月22日にフランス、サンジェルマンで生まれたが、特に音楽家の血筋であったわけではない。たまたまショパンの弟子を名乗る女性の目に留まり、その計らいにより10歳ぐらいでパリ音楽院に入学する。ところが音楽院での作曲の授業では大した成果が上がらない。ドビュッシーの感性が、当時の作曲技法に納まらなかったためと考えられる。しかしピアノの伴奏のクラスでは頭角を現した。

「子供の領分」は、以下の6つの小品からなるピアノ独奏用の組曲である。

1. グラドゥス・アド・パルナッスム博士
2. 象の子守歌
3. 人形へのセレナード
4. 雪は踊っている
5. 小さな羊飼ひ
6. ゴリウオーグのケーキウォーク

「人形へのセレナード」のみ1906年に作曲され、あとの5曲は1908年の作曲である。組曲「子供の領分」を作っている中に、「人形へのセレナード」を組み込んだというほうが当たっているかもしれない。

この曲の最後には「私の愛する小さなシュウ

シュウに、これらの作品への父の優しい言い訳とともに「クロード・ドビュッシー」とサインがある。シュウシュウとはドビュッシーの一人娘の愛称で、彼女はドビュッシー没後1年で逝去した。献辞からこの曲がシュウシュウのために作曲されたことが分かるが、作曲当時シュウシュウは3歳であることから、シュウシュウが弾くために作曲したとは考えにくい。また、献辞に「言い訳」と書くことは通常ではない。そこで、シュウシュウという愛娘を通して自分というものに向き合った作品であることが見えてくる。

原題は英語であるが、ドビュッシーの作曲したほかの曲は全てフランス語で題がついており、題が英語であること自体が意味をもつと考えられる。ドビュッシーは英語は得意ではなかったが、2度目の妻となったエマ・バルダックが非常にイギリスが好きで娘のシュウシュウの乳母も英国人を頼んだほどであった。ドビュッシーがそうした妻の一種の英国かぶれをからかって英語表題としたという見方をする評論家もいるが、からかったというよりは、ドビュッシーがやはりエマ・バルダックとその娘に心を寄せていこうとしたときに英語という表現方法が出てきたのだろうと考えるほうが自然だろう。6つの小曲の各々にも英語の題がついているが、「象の子守歌」の英語表記は間違っておりジャンボがジンボになっている。「人形へのセレナード」もforとofが違っている。そうした誤記からも、ドビュッシーが英語を使うことは本来の自分が中心になったときには起こり得ないともてよいだろう。

Children's Cornerという「乳幼児用の囲い」を意味する題を踏まえると、音楽の中で自分の主体性・独自性を持っていながら、「シュウシュウのための囲い」のなかには立ち入らないで上からのぞいているような印象を受ける。作曲技法や和音構成など、もっと踏み込むこともできる場面でぎりぎりの線を越えずに持ちこたえている。シュウシュウに対しては自分のほうが心を寄せていっ

て、父の思いのままシュウシュウの領域に入り込むことは出来ないでいる。それがドビュッシーにして「父の優しい言い訳とともに」という献辞を書かせたのだと思われる。「子供の領分」は、題のつけ方と作曲技法の両方の点で、ドビュッシーが発表していた前後の曲とは、だいぶ雰囲気が違う1つの作品だといえる。

この曲を作った前の状況をたどると、ドビュッシーの身の騒がしい時期にあたっていたことに気づかされる。まず歌手のテレーズ・ロジェと婚約して解消され、その翌年には別の愛人が自殺を図り、その4年後にはロザリー・テクシエ、リリと愛称する女性と結婚したものの5年後には、妻の元からドビュッシーは去り、エマ・バルダックと同棲し、その10月に残してきた妻が自殺を図った。エマ・バルダック夫人とは、結婚はしたが穏やかな関係に終始したわけではなかった。当時のドビュッシーは、交響詩「海」、「牧神の午後への前奏曲」等の名曲を発表しすでに世の中に名前が出ていたので、これらのスキャンダルは大きく取り上げられて世間に叩かれ、友人はほとんど彼のもとを去った。そういう中で、「子供の領分」を捧げた娘クロード・エマ・シュウシュウが1905年10月30日に誕生した。婚姻届を出したのは、シュウシュウの誕生から3年たった1908年で、ちょうど「子供の領分」を作曲し終わり、デュランから出版した年と重なる。



村山順吉 児童学科長による報告とピアノ演奏が行われた。

そうすると、「私の愛する小さなシュウシュウに、父の優しい言い訳とともに」の「言い訳」に、何が込められているか少し見えてくるような感じがする。

ドビュッシーは、大変な筆まめで生涯で1,500通ほど書簡が残っている。フランソワ・ルシュール編、笠羽映子訳『ドビュッシー書簡集』（音楽之友社）は、その中の1884年から1918年の書簡の研究書だが、本書に収められた書簡の中にもシュウシュウのことはあちこちに書かれている。例えば演奏会の日に「実は娘の具合が悪いので、私はもうこれで帰ろうと思う」と記すなど、「シュウシュウのためには」という姿が散見される。世間に叩かれている状況の中で、ドビュッシーには、娘に向き合っているときにしか持てない独特の思いがあったと思われる。

次に、とくに以下の2曲について見ていきたい。

1. グラドゥス・アド・パルナッスム博士

実はこの曲より前に、クレメンティ（Clementi）作曲の「グラドゥス・アド・パルナッスム」という練習曲がある。クレメンティはピアノの名手で、多くの練習曲を作り、その100曲の練習曲からなるものが「高い山に登る」意味をもつ「グラドゥス・アド・パルナッスム」という呼ばれ、タウジッヒ（Tausig）がそのうち29曲を編んだ。

ドビュッシーが作曲を始めたころは、タウジッヒが監修した29曲集の方が一般的に子どものためのピアノ練習曲集として使われるようになっていた。これらの練習曲集は退屈で、多くの子どもたちを練習嫌いにさせ、それでも珍重される現状を見て、ドビュッシーは「グラドゥス・アド・パルナッスム」に「博士」をつけて茶化し、「グラドゥス・アド・パルナッスム博士」という曲とした。

譜面の景色は16分音符が続く練習曲と似ているが、同じような音型の継続の途中でその音型がゆっくりになり、練習が嫌になった子どもの気乗りしない姿を表す。それから、最後部ではtrès animé（もっと速く）という表示をつけ、もう曲が嫌に

なってどんどん速く弾いてパツと終わって「やったー」といった解放感を表現したといわれる。

また「悪魔のコード」とも呼ばれ、調性に不安定さが加わる増三和音が使われている。

さらに、最終部分は、3本のペダルを駆使しないと弾けない和音の一部の消音を要求しており奏法的にも難しい。

2. 象の子守歌

ドビュッシーならではの作曲技法と新しい音階を取り入れている。

ドビュッシーがよく使った音階が「6全音音階」であるが、6音すべて全音で構成されている不思議な印象を与えるこの音階が使用されている。ドビュッシーの他の曲における6全音階の使い方は和音構成が複雑で、ドビュッシーの作曲技法の本質はそちらにあると考えられる。「象の子守歌」においては、それ以前に発表された作品よりも6全音階の穏やかな使い方がなされており、シュウシュウの存在がドビュッシーの表現方法を少し洗練させたとも言える。

全曲を通しては、ドビュッシーならではの独特の作曲技法が使用されてはいるものの、他の作品に比して新しい技法の奔放な使用は抑えられており、無調まで至らないところとどまっている。この辺りに、ドビュッシー自身が自分を出すことと制御することで、子どもに対して侵してはならない「領分」を守ったと考えられる。ドビュッシーがシュウシュウを思いやり「子ども主体」で考えようとした時に、独自の作曲技法がこういう形で表現されたとも言える。そこに、ドビュッシーの全作品の中でも少々特異であるというこの曲の位置づけがあるだろう。こうしたことは、児童学の視座から「子供の領分」を眺めたときに初めて浮上してくる新しい側面でもある。

（文責：たざわ・かおる 聖学院大学児童学科教授）

児童における＜総合人間学＞の試み 研究 金谷京子氏報告「子どもの言い訳にあらわれるもの」

田澤 薫

2011年度6月22日に開催された今年度第2回目の「児童における＜総合人間学＞の試み」研究会では、金谷京子氏（聖学院大学児童学科）が「子どもの言い訳にあらわれるもの」と題して報告くださった。具体的な事例の報告も含まれていたことから全ての参会者から活発な意見が出され、いっつもに増して賑やかな研究会となった。

以下は、報告内容の概要である。

子どもの言い訳については、従来あまりよいイメージをもたれないが、ソーシャルスキルの観点からは有意義だと考えられる。そのため、子どもの言い訳を発達心理学の視点から分析した。今回の報告は、一人の男児（2歳～6歳）の家庭における発語の記録から言い訳のデータを拾ったものをもとにしている。（なお、データは、ほとんどが、報告者が場面に参与する中で収集されたものであり、一部が対象児の保護者より報告されたものである。「親子の関わり合い」に関する発語として記録した資料から、本研究に関連するものを取り出して分析を行った。報告者が参与することで幼児の発語に影響がある緊張関係はないと考えられる。）

「言い訳」は広辞苑によると「申し訳」「弁明」「弁解」である。インターネットで調べたものによると、「自分の行為に対する、当人にとっては他人を説得できる内容であると思われる論理的名分」となる。ただ、それが自分にとっては論理的名分であっても、相手にとって同様であるかは別問題である。

言い訳についての先行研究は少ない。『ビジネスマンのための言い訳集』の類書、母親向けの『子どもの言い訳がなくなる賢い方法』の類書が何冊か刊行されている程度である。

さて、一般に、言い訳はどのようなときに起こ

るのだろうか。ミスを指摘されたとき、非難されたとき、断るとき、催促されたとき、ほかにも失敗したことに気づいたとき、見栄を張りたいとき、何か借りたいとき、忘れてしまったとき、ルールに違反したとき、基準から外れたことをしたとき等が考えられる。一方で幼児の言い訳はどのようなときに起こるのか、データを拾ってみた。以下、事例の幼児について、言い訳の記録をたどってみたい。

2歳2カ月のときに「シートベルトをしなさい」と言われた際に、それを拒否したいがために「首がかゆいからしないのよ」と言い訳できている。2歳9カ月では、思うように絵が描けない場合に、「これはだめだ」と自己弁護するような言い訳がある。2歳10カ月では、いつもと違うことを指摘されて、「ここじゃないでしょう」と言って否定しているが、これは多分大人が使っていることを先取りしたものと思われる。3歳になると、思うようにできない場面で「忘れちゃった」と言っているが、これは大人もよく使う言い訳例である。また、買い物を我慢する際には「また今度にしようね」と、自分自身に向けた言い訳をしている。「おかしい言い方だね」と大人に指摘されると、「お父さんのまねだよ」と他者のせいに



報告者の金谷京子教授

する言い訳が3歳から入ってくるようになっていく。大きな物を買って欲しくて「大き過ぎて家に置くところがないから買えない」と断られると、「片付けるから大丈夫。買えるよ」と言い訳している。3歳4カ月のとき、リニューアルされた新製品を買って欲しいときに、「新しくなったんだから買わなきゃいけないんだよ」と、自分が買って欲しいとは言わずに購買の必要を訴える言い方が見られた。排泄に誘われたときには、「おむつしてるから大丈夫」と言って断っている。3歳8カ月で暴言を注意された際には、「どこの口が言ってんだ」と口のせいにする言い方が見られたが、これも大人の真似と思われる。3歳9カ月では、新しい物が欲しいときに、自分が欲しいと言わずに「(ぬいぐるみの) カメさんが欲しいって言うてるんだ」と、ぬいぐるみのせいにする言い方をしている。4歳2カ月では、新しいミニカーが欲しいときに、「お父さんが買ってって言ってたよ」と父親を引き合いに出している。幼稚園を好きたくな理由を聞かれたときには、「面倒くさいから」と言っている。字が書けるようになって、名前の字を書くように要求された場面では、「お父さんに書いてもらえば。お父さん上手だから」という逃げ方が見られた。空腹でお菓子が食べたいときには、「ずっとお腹が空いてるんだから、やっぱり食べなきゃいけないんだよ」と言っている。やってはいけなくと注意された際には、「そんなこと言ったら遊んであげないから」と攻撃姿勢の言い方をする。就寝時の読み聞かせの際に「絵本は3冊でおしまいね」と言われると、「今日は特別5冊にするから」と自分でルールを決めて交渉する言い方が見られる。4歳11カ月では、「どうしてするの?」と尋ねられて、「そう言われても…」と理由をはぐらかす言い方が見られる。5歳2カ月で、パンを食べ続けている姿を「ずっと食べてるんじゃない」と親に指摘されて、「だって長い旅なんだからしょうがないじゃない」という言い訳も同種である。5歳6カ月では、幼稚園



言い訳をする子どもは「悪い子」なのだろうか? 事例をもとに活発な議論がなされた

ごっこで歌を歌っている場面で「ちょっとよくわかんなかったからもう一度歌ってよ」と言われると、「もう言わないからね。ちゃんと頭の中に入れておかないとわかんないよ」と説教する言い方がある。食事中に使えるのに箸を使ってないことを指摘されると、「だって使いづらいから使わないんだ」と言う。積み上げる遊び道具で遊んでいて崩れてしまった場面では、「これは自分家のものと違うから、色が違うからだめなんだ。難しい」と、遊び道具のせいにする言い訳が見られた。5歳9カ月で、車の中でお菓子を食べそれを落とした場面で、「あーあ、落ちちゃった。お父さんが下手な運転するからだよ」と父親の運転のせいにする言い方が見られた。6歳2カ月では、「どうして野菜食べないの」と聞かれた際に「さあねー、どうしてでしょう」とはぐらかすという言い方が見られた。「肩たたいてよ」と頼まれて、「僕だって疲れてるんだよ」と言い訳してやらない姿も見られた。乳児期から持っている感触のいい布を顔にこすりつけながら、止めなければいけないと自覚しているので、自分の行動の正当性を「ここのところのこういうところがいいんだよ」と一生懸命に説明している姿も見られた。6歳7カ月では、人を説得して人に買わせるという言い訳が見られるようになる。自分がミニカーを買ってもらいたい場面でまず親に勧め、「お父さんも好きだ

から、何々店でミニカー買わなくちゃ」という言い方をした。

以上のように、加齢とともに言い訳が自分以外のものに原因帰属をするようになってくる。途中で、他者のせいにする時期があるが、他者のせいにする時期から徐々に相手に薦めて相手を説得するような行為が出てくるようになり、理由を明確にせずにはぐらかす手法も見られるようになる。これは、理由を言うと、さらに追究されることがわかってきているものと思われる。これらが、事例のデータから気づいたことである。

それでは、人はなぜ言い訳をするのか。それから、言い訳する子どもは「悪い子」なのか。言い訳の理由は大きく2つあるだろうと思われる。

1つは自己維持としての言い訳、つまり自己防衛的な、自己崩壊を起こさないための言い訳である。人間には自己維持本能があり、自己崩壊を起こさないように自分の過去の決断や行動を正当化する理由を事後に無意識のうちに探し出す。つまり、後悔にさいなまれないようにする仕組みを、人間は心理的メカニズムとして持っており、言い訳もその手段の1つだろうといわれている。感情は対人関係を含む環境と自己のかかわりのなかで、自己資源を保護するとともに自己資源の拡張を促す適用促進システムであり、怒りや悲しみのネガティブ感情が有害・無益、喜びや嬉しさ・楽しさのポジティブ感情は有益とする見解が世間一般では浸透しているように見受けられる。実際、人はネガティブ感情を意識化すると、その低減をはかる行動を選択・実行したり、原因帰属過程を評価してその意味を解釈し、自己に及ぼす脅威の低減を試みる。ネガティブ感情への対処は意図に反して自己資源を消耗・疲弊させる場合もある。対自己的にも対人的にもネガティブ感情のパワーは強力であり、それに逆らうような対処は結果として自己や他者を傷つける。人はネガティブ感情を経験すると、その経験を反芻するとともに他者に語ることが多い。他者に語ることで自分を合理

化したり、ネガティブ感情を言語化することによって、ワーキングメモリー容量の消耗や自己制御力の低下を軽減させることができる。

ワーキングメモリーは、短期記憶の1つで作業記憶のことである。ワーキングメモリーの働きによって、私たちは何かをしながら次のことも記憶をして同時にいろんなことができるが、ネガティブ感情が働くとワーキングメモリーが疲弊することがあり、それを言語化による浄化作用で防ぐことができる。ネガティブ感情を言語化させて、語りを通して自己変容を誘導する。それが、いわゆる認知療法・精神分析療法・語り療法（ナラティブ）という心理療法である。こうして考えると、言い訳には自己を維持していくための効果があると期待される。子どもについても同様で、事例でもそれ以上追究されて自分が悲しい思いになることを防ぐ言い訳が出てきている。

もう1つは、対人交渉方略としての言い訳であり、相手との交渉等の手段に使えるものである。対人交渉の方略は、発達的に見ると幼児期の最初は一方向的な抗衝動的なものだったのが、互いに相手のことを認めて交渉する協調的な段階を踏んでいく。今回のデータで見ると、事例の幼児の言い訳はまだ一方的で、相手のことを認めながら交渉するところまでは発達していない。

相手に説得力のあるような言い訳がきちんと言葉で言えることは対人方略としても大切である。

大人は子どもの言い訳を否定しがちであるが、その子どもなりの理由を聞き出すという環境を大人が保障することも大切だと考えられる。

（文責：たざわ・かおる 聖学院大学児童学科教授）

スピリチュアルケア研究講演会 スピリチュアル・コミュニケーション —生きる支え—

2011年6月3日、聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター、聖学院大学大学院共催でスピリチュアルケア研究（研究代表・窪寺俊之教授）の講演会が開催された。

本講演では、「スピリチュアル・コミュニケーション—生きる支え—」というテーマで聖路加国際病院、緩和ケア科医長、林章敏氏が、20年以上の緩和ケア医として培った経験に基づき以下の内容を講演された。①緩和医療全般について、②スピリチュアル・コミュニケーションについてである。

1. 緩和医療全般について

緩和医療は、1990年のWHOの緩和ケアの定義が提示された当時、症状コントロールが治療の主なものであった。しかし同定義によりはじめて全人的なケアの必要性が取りざたされた。なぜならば、身体的な苦痛は、時に社会的、精神的、スピリチュアルな辛さが痛みとなって現れる場合があるからで、そのことについて周囲の理解が必要とされたからである。

また、緩和ケアの時期であるが、人間は死ぬ存在であり、どこかで死を受容する援助に変えて行く必要がある。そのため、残された時間を、副作用を抱えながら治療することに使うのではなく、普通の生活が送れる緩和ケアに専念したい人もいる。従来は、緩和ケアは終末期とされていたが、現在は、積極的な治療が身体的なダメージを与えるため、緩和ケアと並行的に受けることが勧められている。なぜならば、痛みが取れることで治療にきちんと向き合え、その結果、最近の研究では、緩和医療が、延命に役立つとの報告がなされている。

そして、当然のことながら、早期からもたらされた緩和ケアにおいて、人の生活や生命、人生の質の向上に役立つことが報告されている。例え

ば、日本人が終末期に大切にしていることとして、苦痛の補償、希望や楽しみ、医師や看護師の信頼、負担にならないこと、家族や友人との関係、自立していること、落ち着いた環境を過ごすこと、人として大切にされること、人生を全うしたと感ずることなどが挙げられている。痛みからの解放は、これらの希望や願いを叶えることへ役かうであろう。そのため、今後は終末期に限定された緩和ケアだけでなく、シームレスなケアがより一層、求められる。

2. スピリチュアル・コミュニケーションについて

ここでは、緩和ケアにおけるスピリチュアルの定義（WHO1989）は、「人間として生きることに関連した経験的一側面であり、身体的、感覚的現象を超越しえた体験を表す言葉」である。我々人間は、生きる上で支えにしているものとして、愛や癒し、自信、自立、誇り、意味、目的、信仰などがある。一方、ガンの終末期に体が弱ってくると、時間性・関係性・自律性の障害が表出され、これらの支えが満たされなくなり、価値体系ががらりと変えられることが経験される。その際に必要になるのがスピリチュアル・コミュニケーションである。

スピリチュアル・コミュニケーションは、人と



講演者の聖路加国際病院緩和ケア科医長 林章敏氏

して生きる支えを意識しながら日常のコミュニケーションを図ることで、人を支えるコミュニケーションのことである。このコミュニケーションは、心に痛みを感じてから、または、失われてから行うものではなく、日常的に生きていくことの重要性が分かっているならば、自然にスピリチュアルなことを意識したコミュニケーションが可能である。例えば、普段から人との関わりの中で感謝する接し方をしていれば、それがスピリチュアル・コミュニケーションになる。また、ありのままを受け入れ、自立を援助するため、その人の誇りに触れ、死を前提にした話をし、共有し、希望を叶えることもこれにあたる。例えば希望が実現できなくても「そうならいいですね」と思い話すことが大事である。加え、コミュニケーションで大切なことは、①傾聴、②共感、③感情への対応などである。例えば、沈黙を待つということ、辛さへの共感、これまでの支えや、将来を考えるなどさまざまなことがある。

以下は、支えになる対応例である。①「何もできなくなったり、生きる意味がない」というとき、存在そのものへの意味や意義、それを家族が感じている場合があれば、家族から伝える。②「いつもお世話になっている」というとき、「自分もいつかお世話になるから今はさせてください」と、依存による自己価値観の低下に対して、

迷惑ではないこと、それを希望していることを伝えるなどがある。

一方、以下は終末期のガン患者へのインタビューで明らかになったことである。①「助けになったもの」は、朗らかで親切、病気以外のこともよく聞くこと、②「関係性に由来する苦痛」は、家族と過ごすことが段々できなくなったときに何かできることを探すとき、③「将来に対するコントロール感が喪失したとき」は、何とかないと先のことは考えない、④「心理的に負担を感じるとき」は、何気ない普通の支えや役わり、楽しみを見つけること、⑤「自分らしさの喪失」は、重要なことが未完成の場合には完成させる、⑥「意思決定のプロセス」は、協働医療として、情報共有—合意モデルを大切にするなどである。このプロセスの具体例は、リビングウィルそして、本人と家族が署名し、何枚も同じものを渡し書き直しができるようにしている。

最後に、スピリチュアルペインに対する宗教における役わりであるが、生きる意味や目的、愛、赦し、死後の世界の理解、祈りを与えることなどができる。

以上が、本講演における、緩和医療全般について、スピリチュアル・コミュニケーションについてである。

(2011年6月3日、聖学院大学ヴェリタス館教授会室)

(文責：越智裕子 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

*30ページのアンケート結果もご覧ください。



緩和医療と人を支えるスピリチュアルコミュニケーションについての話をうかがった

共同研究報告

【ラインホルド・ニーバー研究】 ニーバーの愛と正義の弁証法的理解および 世界共同体論

2011年6月6日、聖学院本部新館2階集会室に於いて、第1回ラインホルド・ニーバー研究会が開催された。参加者35名で、国際基督教大学教授の千葉眞氏から、上記の表題について報告をいただいた。概要は以下の通りである。

千葉氏は、ラインホルド・ニーバーの今日的意義（Reinhold Niebuhr Today）・リチャード・J・ノイハウス、宗教的に基礎づけられた公共哲学の再構成の課題との関連でニーバーは重要であるとしている。

「リチャード・ローティエ」「ジョン・ロールズ」「ロバート・D・パットナム」「一般的に宗教的言説を公共理性の領域から排除しようとするリベリズムの立場への批判」「ユルゲン・ハーバーマス・チャールズ・テイラー、ジュディス・バトラー、コーネル・ウェスト」の五つの事例を提示し、公共理性と宗教の問題を論じられた。

次に、1、愛と正義の弁証法的理解『人間の本性と定め』、2、『光の子と闇の子』における世界共同体論について分類され、ニーバーの典型的主張は、神の国の完成、愛の完全な成成は、歴史の終極においてのみ想望される。歴史の内側にあってはせいぜい「近似的解決」(proximate solutions)



国際基督教大学教授 千葉眞氏

が期待されるのみである。また、ニーバーの世界共同体論は、基本的には世界共同体の形成を肯定的に捉え、その実現を希求する立場に立っているとまとめられた。

おわりに、ニーバーの今日的意義、ヨーロッパ連合（EU）の試みについて結ばれた。

質疑応答では、活発な論議が行われた。

（文責：松田寿美子 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2011年6月6日、聖学院本部新館2階）

【日韓教会交流（関係）史研究】 韓国の神学について —モルトマンとの関わりから—

2011年6月9日、第1回日韓教会交流（関係）史研究会において、「韓国の神学について—モルトマンとの関わりから—」という表題のもとで長老会神学大学校キリスト教思想文化研究院研究員、同校非常勤講師 洛雲海（ナク・ウンヘ）氏が講演をされた。これは、氏が韓国の長老会神学大学校に提出した博士論文「モルトマン神学と韓国神学」をもとにしたものである。24名の参加があった。

韓国がキリスト教国であること、またモルトマン自身も韓国に好意的であることは周知の事柄である。氏の報告によると、このモルトマンのもとで神学博士の学位を取得した韓国人はすでに9名にのぼるという。

氏の研究は、思想的内容も政治的スタンスも異なる三つの神学、すなわち民衆神学、趙鏞基神学、統全的神学がそれぞれの仕方でモルトマンの神学と共通点をもち、影響を受けているという事実を考察したものである。モルトマン神学の韓国神学界への受容の要因として氏が考えているのが、その実践志向的性格である。このモルトマン神学の特徴は、後に神の創造世界全体における「神の国の形成」という実践的課題へと展開されていくこ

とになる。この神学的特質ゆえにモルトマンは、民衆神学は思索と行動が一つになっている点を適切に評価できたのであり、「テオリアとプラクシスの統合」としての趙鐮基神学が潜在的に有していた統全的性格を開花させることができたのであった。三つ目の神学、つまりは李鍾聲^{イ・ジョンソン}によって提唱され、金明容^{キム・ミョンヨン}によって発展的に継承された統全的神学は、統合性 (integrity) と全体性 (Wholeness) の双方に重点を置いている。統全的神学は「可能な限り全ての真理」を統合し、しかも全体性 (穩全性) を志向し、宇宙万物が神の救いの対象であり、その働きの方が万有の中にあるという信仰に立脚する。要するに、統全的性格、そしてさらに「神の国のための実践的神学」という性格が、韓国の神学とモルトマン神学を結び付けているのである。

氏はさらに、「人間の霊や魂を中心とする」パラダイムから「神の国を中心とする」パラダイムへの転換を企てたという点においても、両神学の共通性を確認する。その転換作業には伝統や過去と決別し、自らを変化させなければならないという痛みが伴うであろうが、真理のためにはその痛みを乗り越えようとする力と勇気がそれぞれの神学にあったことを意味している。

氏の見るところ、韓国のこれからの神学界を引っ張っていくのは統全的神学である。そして、この神学は韓国のみならず、世界においても十分通用する実力を持っているとされる。

氏によって明らかにされた韓国における神学界の成熟性は、欧米の神学思想の翻訳と輸入に終始

している日本の神学界に対して反省を迫るものとなった。会の締めくくりに述べられた大木英夫研究所所長の言葉にもそれは滲みでていたように思われる。しかし、それは同時に、日本の神学界が韓国の神学界と連携を強化していく活動の意義を再確認させてくれるものでもあった。

(文責: 兼松誠 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

(2011年6月9日、聖学院本部新館2階)

【憲法研究】 ドイツ基本法 (憲法) の成立と展開

2011年6月13日、今年度一回目の憲法研究会が開催され18名が参加した。今回、「ドイツ基本法 (憲法) の成立と展開」という表題で発表を担当されたのは本学大学院教授の栗城壽夫氏であった。本年度一回目ということもあり、栗城氏独自の論考の発表というよりも、今年一年の議論の導入として基本事項の概説という性格が強かったと言えるであろう。

まず、ボン基本法の成立のいきさつが確認された (西側戦勝国による憲法制定の指示、それに対するドイツ側の対応と抵抗、制憲議会における審議、そして占領軍軍政官の承認、連合国の承認、そして1949年5月23日の発効)。

次に基本法の展開が確認された。ひとつは基本法の改正による展開であるが、基本法は2009年7月29日までにすでに57回の改正を受けている。これは、時代の要請にこたえる必要性や、規範と現実との乖離を避けるためであるが、憲法の權威を落とすデメリットもある。さらにその中でも主要な改正として栗城氏が例示したのは、再軍備のための改正 (1956)、緊急事態体制の導入のための改正 (1968)、緊急事態体制導入の代償のための改正 (①抵抗権の保証 (1968)、②「憲法異議」の憲法レベルでの保障 (1969))、ドイツ統一にともなう改正、基本権制限のための改正、基本権保障の強化のための改正、国家目的規定の導入 (①ヨーロッパ統合、②環境保護、③動物保護)、である。



講演者の長老会神学大学校キリスト教思想文化研究院研究員 洛雲海氏



栗城壽夫 聖学院大学大学院教授の発表による第1回憲法研究会。

次に、ヨーロッパ統合の進展に伴う憲法上の問題についての説明が為された。ヨーロッパ裁判所判決を通じて、ドイツ法に対して優位が認められているヨーロッパ共同体法が、ドイツ法にとって代わりつつある、という。しかし、一方でその進展に対して、憲法の同一性維持ということを根拠とする限界付けの試みも存在している。それによれば、ヨーロッパ連合は国家同盟にとどまるべきであって領邦国家になってはならないのである。この最後の問題は、領邦国家群であったドイツの複雑な歴史性を反映している。聴講者から寄せられた質問も、主権国家をどのレベルで考えるのかというものであった。

(文責: 兼松誠 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程)

(2011年6月13日、聖学院本部新館2階)

総合研究所

秋の催事のご案内

■ カウンセリング研究センター・シンポジウム 「東日本大震災を神学的にどのように受け止めるか」

—信仰と教会の再建のために—

信仰にとって教会にとってこの大震災をどのように受け止めたらいのか。神学的な意味を考えてみる。

日時: 2011年10月28日(金)13:30 ~ 18:00

場所: 女子聖学院クロウソンホール

(JR山手線駒込駅徒歩7分)

講師: 柳谷明(前山形六日町教会牧師)

小友聡(東京神学大学教授)

大木英夫(聖学院大学大学院長)

平山正実(聖学院大学大学院教授)

参加費: 無料

■ 小学校英語指導法セミナー

「こうやって教えよう小学校英語」

—現場からの提案—

小学校で英語活動を行う具体的な実践法を紹介し、すぐに授業で使えるオリジナル教材を提供する。

日時: 2011年11月18日(金)18:45分 ~ 20:40

場所: 聖学院本部新館2階(JR山手線駒込駅徒歩3分)

講師: 藤原真知子、ブライアン・バード

(聖学院大学総合研究所特任講師

聖学院小学校・幼稚園講師、

世田谷区立立賀小学校アドバイザー)

参加費: 1,000円(資料代・茶菓)

定員: 40名

■ 福祉のこころ 講演会

「福祉の役わり・福祉のこころ」

—福祉と宗教—(仮題)

日時: 2011年12月3日(土)午後

場所: 聖学院大学ヴェリタス館教授会室

(JR高崎線宮原駅またはJR川越線西大宮駅より学生バス)

講師: 石川到覚(大正大学教授)

参加費: 無料 定員: 100名

お申し込み、お問い合わせは

聖学院大学総合研究所

TEL: 048-725-5524/FAX: 048-781-0421

research@seigakuin-univ.ac.jp

聖学院大学大学院・総合研究所 教員活動報告書（2010 年度）

もり た み ち よ
森 田 美 千 代

現職位：教授

本学への就任：2000年 4 月 1 日

最終学歴：

1999年10月 ドルー大学大学院博士課程アメリカ
の宗教と文化専攻修了

取得学位：

1972年 3 月 教育学修士（国際基督教大学）

1990年 5 月 神学修士Master of Theological Studies
（ドルー大学）

1998年 5 月 哲学修士Master of Philosophy（ドルー
大学）

1999年10月 Ph.D.（ドルー大学）

所属学会：American Academy of Religion（1997年
～）、アメリカ学会（2000年～）、日本キリス
ト教教育学会（2000年～）、初期アメリカ学
会（2001年～）

担当科目：アメリカ文化学研究A（大学院、古屋
教授との共同担当、アメリカ文化と宗教）、
アメリカ文化学研究F（大学院、マーティン・
ルーサー・キング研究）、アメリカ文化学A演
習I／特殊演習（大学院、古屋教授との共同

担当）、アメリカ文化学特殊研究（大学院、
博士論文指導）、研究方法特論I・II（大学院、
研究の基本である「書く力」の指導）、キリ
スト教とアメリカ文化A・B（学部、ハリエッ
ト・ビーチャー・ストウ研究）、キリスト教
教育論A（主としてホーレス・ブッシュネル
のキリスト教教育論）

学生指導：大学院生の研究上の問題を、時間をか
けて個人指導した。

専門分野：アメリカのキリスト教と文化

研究テーマ：マーティン・ルーサー・キング研究、
ハリエット・ビーチャー・ストウ研究、ホー
レス・ブッシュネル研究

研究内容：キングに関しては、彼のリーダーシッ
プの源泉について研究を進めている。ストウ
に関しては、『アンクル・トムの小屋』に焦
点を当てて研究を進めている。ブッシュネル
に関しては、主として女性論と教育論の研究
を進めている。

研究業績（2010年度〈2010/4 ～ 2011/3〉）

下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・ 学会名等	概要	刊行・ 発表年月
Bb 学術論文	ローザ・パークスの 生涯—マーティン・ ルーサー・キング・ ジュニアとの出会い まで—(単)	『キリスト教と諸 学』26号、171-187頁。	キングに出会うまでのパークスの人 生をたどることによってわかること は、育った家庭環境にしても、信仰 と教会生活にしても、受けた学校教 育にしても、公民権運動への参加の しかたにおいても、両者は意外と異 なっていた。	2011.3

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
Bb 学術論文	ローザ・パークスとマーティン・ルーサー・キング・ジュニア・モンゴメリー・バス・ボイコット運動以後―(単)	『聖学院大学総合研究所紀要』No.50、209-230頁。	本論文は、まず、キングは、モンゴメリー・バス・ボイコット運動を最初から組織し指導したのではなくて、パークスその他が準備した土壌に、後から登場してきたこと、次に、パークスは、キングの非暴力抵抗思想に関して一定の理解を示しながらも、それには完全には従えないと思い続けていたこと、さらに、キング個人ということではないが、MIAやSCLCなどの組織が性差別をもっていたことなどを、明らかにしている。	2011.3
G 書評	『神のみくらに玉と輝け―愛と祈りの教育者 中川咲子の物語』(単)	『聖学院大学総合研究所 Newsletter』vol.20, No. 5、4-5頁。		2011.3

ふじ わら あつ よし
藤 原 淳 賀

現職位：教授

本学への就任：2004年4月1日

最終学歴：

1989年3月 慶應義塾大学大学院

1994年5月 Golden Gate Baptist Theological Seminary

1999年7月 University of Durham

取得学位：

1989年3月 教育学修士（慶應義塾大学）

1994年5月 Master of Divinity (Golden Gate Baptist Theological Seminary)

1999年7月 Doctor of Philosophy (University of Durham)

所属学会：American Academy of Religion, 1996-, 日本基督教学会2001-, 日本福音主義神学会, 2004-, 日本宗教学会, 2005-, 日本宣教会, 2005-, Society of Christian Ethics, 2006-, Society

for Study of Christian Ethics, 2008-

担当科目：キリスト教概論A、キリスト教概論B、キリスト教信仰と文化、キリスト教と物語、キリスト教文化学研究A（大学院）

学生指導：指導を求めて来た学部生、大学院生には個人的にアドバイスをしている。

専門分野：キリスト教組織神学、キリスト教社会倫理学

研究テーマ：文化の神学、教会論

研究内容：キリスト教信仰の社会的関わりを大きな意味での研究課題としている。現在は、キリスト教の独自性と、広く非キリスト教世界にも適用可能なキリスト教倫理（人権、民主主義、平和の維持）とを結ぶ理論的土台をキリスト論のうちに見出すことを課題としている。

研究業績（2010年度〈2010/4～2011/3〉）
下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
G 座談	「危機の時代を超えて」座談会	『札幌宣言:21世紀における教会のチャレンジ』pp. 110-162.		2010.7

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
Bb 学術論文	「宣教の基礎理論としての神の自由と限界状況: カール・バルトとジョン・ヨーダーによる戦争理解」	『宣教学ジャーナル』vol. 4, 107-124.		2010.7
F 講演	「日本宣教概観とその課題」	日本同盟基督教団・西大寺キリスト教会80周年記念第31回西大寺コンベンション講演1		2010.7.3
F 講演	「神の物語と西大寺教会の物語」	同講演2		2010.7.4
F 講演	「なぜ日本に教会が必要なのか?: 世を改革する教会」	同講演3		2010.7.4
F 講演	「責任ある教会として、軍備の問題に関わって行くか: 沖縄基地問題を念頭において」	カンバーランド長老神学社会委員会「平和講演会」2010カンバーランド長老キリスト教会高座教会		2010.10.9
G 評論	「人的(personal)な信仰と個人主義的(individualistic)な信仰」	「21世紀の教会のために」『いのちのことば』2010年11号		2010.11
G 評論	「2つの誤り: 変えないうことと、変えすぎることを」	「21世紀の教会のために」『いのちのことば』2010年12号		2010.12
G 評論	「ケープタウン2010を通して考えたこと(1)」	「21世紀の教会のために」『いのちのことば』2011年1号		2011.1
G 評論	「文化の神学: 教会がいかに関わっていくか」	町田クリスチャンセンター 冬季聖書学校		2011.1.10
G 評論	「ケープタウン2010を通して考えたこと(2)」	「21世紀の教会のために」『いのちのことば』2011年2号		2011.2
G 評論	「300年先を考えた教会形成を」	「21世紀の教会のために」『いのちのことば』2011年3号		2011.3

現職位：准教授

本学への就任：2003年4月1日

最終学歴：

1982年3月 大東文化大学文学部

2011年3月 聖学院大学大学院

取得学位：

2011年3月 学術博士 聖学院大学大学院

所属学会：日本犯罪心理学会（1982年～、2003年理事～）、日本矯正医学会（1982年～）、日本心理臨床学会（1986年～）、日本描画テスト描画療法学会（1990年～、1990年～評議員（理事）、2004年～常任理事、2009～副編集委員長）、東京臨床心理士会（2003年～）、日本臨床死生学会（2005年～）、日本福音主義神学会（2006年～）

担当科目：キリスト教とカウンセリング1、キリ

スト教カウンセリング事例研究（福祉学研究科）、アートセラピー入門（聖学院大学けんかつオープンカレッジ）、キリスト教カウンセリング概論（キリスト教関連科目）、スピリチュアルケア論（学部）

学生指導：修士課程学生への研究指導

専門分野：臨床心理学

研究テーマ：心理テスト、心理療法、キリスト教カウンセリング

研究内容：雨の中の私画テストの検証、適用に関する研究。非行をはじめ、依存やハラスメント等行動化型のクライアントに対するカウンセリングの実践と研究。キリスト教牧師のメンタルヘルスや牧会カウンセリング活動の調査、分析に関わる研究。

研究業績（2010年度〈2010/4～2011/3〉）

下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
Ba 論文	非行少年の家族画の研究-相互作用性に着目した技法の理解とその活用	聖学院大学大学院博士(学術)乙4号	非行少年の家族画について、その診断・治療技法について、相互作用性の観点から見直し、再考察を行った。	2011,03
Bb 論文	グリーフカウンセリングとアート	「臨床描画研究」第25巻、日本描画テスト描画療法学会、北大路書房	グリーフカウンセリングにおけるアートセラピーや日常生活のアート体験の意味について、事例を通して考察した。	2010,08
Aa 書籍	雨降りの心理学 雨が心を動かすとき	燃焼社	雨の持つ心理的象徴価に注目し、日本文学をテキストに読み解くことを試みた。単著。	2010,08
G 評論	健康を失ったとき考えること	「牧会ジャーナル」第47号、いのちのことば社	信仰者のターミナルの心理的トピックスを経験則的に指摘した。	2010,06
G 評論	「自分の弱さと限界を認めること」を考える(8)	「牧会ジャーナル」第48号、いのちのことば社	中年期の宗教者の性的逸脱行動の深層を考察した。	2010,09
G 評論	牧師の心理的ダメージとしての「別れの悲しみ」	「牧会ジャーナル」第47号、いのちのことば社	牧師の直面するグリーフについて考察した。	2010,06
G 評論	「教会生活の寿命」論を考える	「牧会ジャーナル」第49号、いのちのことば社	キリスト教信仰者が教会から離れる際の心理学的意味を考察した。	2010,12
G 評論	現代人の生活とストレス	「みずさき」第65号、青山学院女子短期大学	学生の抱えやすいストレスとその対処の考え方について論じた。	2011,03

区分	題名	掲載誌・発行所・ 学会名等	概要	刊行・ 発表年月
Ab 書籍	カウンセリング実践 ハンドブック	丸善出版	項目分担執筆、「非行・犯罪臨床における コラージュ療法」	2011,01
G 評論	信徒がかかわる「牧 師のメンタルヘル ス」	「いのちのことば」7 月号、いのちのこ とば社	信徒の視点から、牧師のメンタルヘル スの実態と支援の実際について考 察した。	2010,07
G 評論	映画にカウンセリング を学ぶ	「出版ニュース」11 月上旬号、出版 ニュース社	映画をテキストに、カウンセリング の臨床知を学ぶことを提言した。	2010,11
座談	曖昧さに耐える雑誌	「本のひろば」7月 号、キリスト教文 書センター	雑誌Ministryを巡って、キリスト教界 のさまざまな問題について対談した。 (八木谷涼子、平野克己)	2010,07
座談	ウエ、シタ、ウチ、 ソトから見たキリス ト教	「Ministry」第6号、 キリスト新聞社	雑誌Ministryを巡って、キリスト教界 と社会との関わりなどについて対談 した。(八木谷涼子、平野克己)	2010,07

ディーン ウォレン サザデン

Dean Warren Sotherden

現職位：Seigakuin Junior and Senior High School

本大学への就任：1997年4月1日

学 歴：

1982年7月 Ohio University

1983年7月 U.S. Defense Language Institute

1983年12月 U.S. Military Intelligence School

1997年5月 Temple University

取得学位：

1982年6月 B.A. (Cum Laude) Anthropology
(Ohio University)

1997年5月 M.Ed. TESOL (Temple University)

担当科目：I taught two Special English Classes in addition to other English classes. One Special English Class consisted of 7th, 8th and 9th graders who have displayed a special ability in English. The Special English Class was held five times per week during the academic year.

Another Special English Class consisted of 10th graders who have displayed a special ability in English. The Special English Class was held five times per week during the academic year. I conducted TOEIC training for junior high and high school students in seminars and in the Special English Classes. I conducted TOEIC training for 7th, 8th, 9th and 10th graders. Seminars were held once per week after school and during the Summer Seminar Period.

学生指導：I led a weekly English Bible Study for junior high and high school students.

専門分野：EFL Education and the TOEIC

研究テーマ：TOEIC preparation and Second Language Acquisition

研究内容：I am researching the ways that students can raise their TOEIC scores and communicate fluently in English.

たけ ぶち か おり 竹 渕 香 織

現職位：助教

本学への就任：2005年4月1日

最終学歴：

1995年3月 聖学院大学人文学部児童学科 卒業

1999年3月 聖学院大学大学院政治政策研究科
修了

取得学位：

1995年3月 人文学学士（聖学院大学）

1999年3月 政治政策学修士（聖学院大学大学院）

所属学会：日本発達心理学会（1998年～）、日本心
理臨床学会（2004年～）、日本描画テスト・描
画療法学会（2005年～）、日本発達障害学会
（2006年～）、日本臨床死生学会（2010年～）

担当科目：自由学園非常勤講師 「心理学」担当

人間の健康な発達と疾患や障害、不適応など
について概観。

学生指導：学生相談室にてカウンセリング業務（週
2日）、フレッシュマンオリエンテーション、
学生部オリエンテーション等で心理教育担当

専門分野：臨床心理学

研究テーマ：学生相談、青年期

研究内容：・青年期の発達障害について、特に支
援体制の構築について
・青年期の死生観
・学生相談での面談、アセスメント方
法について

研究業績（2010年度〈2010/4～2011/3〉）
下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・ 学会名等	概要	刊行・ 発表年月
Aa 著書	死生学叢書3	聖学院大学出版会	学生相談という臨床の場では会う「死」と、喪失体験に対する青年期特有の捉え方、それに対するグリーフケアについて述べた。(生と死の教育の青年期を担当)(共)	2011.3
C 学術論文	「……私たちが長い 間会えないでいるこ とを大変寂しく思っ ています」 —エーリヒ・フロム ＝パウル・ティリッ ヒ往復書簡及び関連 書簡の解説と翻訳	聖学院大学総合研 究所紀要 No.49	E・フロムとP・ティリッヒの公私にわたる交流を整理し、さらに両者の往復書簡と関係書簡から互いへの影響を探究。 （「フロムにおけるティリッヒ」の章と書簡の翻訳を担当） マック・グーテマン財団の2009年度・2010年度のドイツ＝日本文化交流基金の助成に基づく研究の一部。(共)	2011.3
F 学会発表	大学生の死生観に関 する意識調査 —死 生観形成の要因を探 る—	臨床死生学会大会	首都圏の大学生に行ったアンケート調査から、死のとらえ方と生のとらえ方の関連性と傾向を探究した。またそこから死生学教育につながるポイントを指摘した。	2010.12
J その他	学生サポートのため に(パンフレット)		配慮が必要な学生(特に発達障害)の特徴と支援のポイントをまとめ、全教職員に配布。	2010.5

こう まん そん
高 萬 松

現職位：助教

本学への就任：2005年4月1日

最終学歴：

1981年2月 韓国、慶北大学校工科大学卒業

1999年2月 東京神学大学大学院修士課程修了

2005年3月 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程修了

取得学位：

1999年2月 神学修士（東京神学大学）

2005年3月 学術博士（聖学院大学）

所属学会：日本基督教学会(2001年～)、日本ピューリタニズム学会(2005年～)、学校伝道研究会(2005年～)

担当科目：(大学)キリスト教とアジア文化A、キリスト教とアジア文化B

専門分野：組織神学

研究テーマ：日韓教会交流史

研究内容：戦後の日韓教会交流史を以下の項目に分けて研究を進めている。1) 日本基督教団と韓国三教団との「宣教協約」を結ぶまで。2) 民主化闘争の時代、両国の教会の「連帯」について。3) 両国教会の宣教課題の共有について。4) 日本聖公会と韓国聖公会との交流について。5) 日韓教会交流に関する資料のデジタル化など。

研究業績(2010年度(2010/4～2011/3))
下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
E 翻訳	청교도(清教徒)	基督教連合新聞社(ソウル)	大木英夫『ピューリタン』聖学院大学出版会、2006年の韓国語翻訳。	2010.6.21
E 翻訳	殉教を免れた李源永牧師の歩み	『聖学院大学総合研究所紀要』No.50	長老会神学大学校林熙國教授の著書『学者・牧会者、李源永研究』の解説及び第5章の日本語翻訳。	2011.3.31
Bb 学術論文	韓国教会の成長と危機	『聖学院大学総合研究所紀要』No.48	韓国のキリスト者の割合は、今まで漠然と用いられている全人口の25%の1200万ではなく、18.3%の862万人である。	2010.9.30
D 研究ノート	韓国におけるメソジスト教会の受容と成長(1)	『聖学院大学総合研究所News Letter』Vol. 20, No.2, 2010	1883年に11人の使節団がアメリカでGoucherに遭った。その繋がり、日本滞在中のMaclayの手伝いによって韓国宣教が可能となった。キリスト教に排他的であった当時の状況を乗り越え、教会が発展できたのは、医療と教育を宣教の前面に出したからである。	2010.9.30
D 研究ノート	韓国におけるメソジスト教会の受容と成長(2)	『聖学院大学総合研究所News Letter』Vol.20, No.3, 2010	1919年の「三・一独立運動」以降、急速に変化する社会に対処するために、教会は組織や伝導方法を改善するよう要請された。1930年12月に「キリスト教朝鮮監理会」が形成され、独自の信仰告白を宣言し、韓国のメソジスト教会のアイデンティティを明確にした。	2010.12.31
D 研究ノート	韓国教会における平和統一路線	『聖学院大学総合研究所News Letter』Vol.20, No.3, 2010	韓国教会における平和統一路線は大きく二つある。大韓イエス教長老会と韓国基督教長老会の路線である。日本の教会は、韓国の方の教団に偏るのではなく、「南北平和統一問題」については、両教団とバランスよく交流する必要があると考えられる。	2010.12.31

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
F 発題 コメント	「1910年から1945年までの日本側から見た日韓キリスト教会交流」をめぐって	聖学院大学総合研究所「日韓教会交流史」第1回研究会	「1910年から1945年までの日本側から見た日韓キリスト教会交流」(松谷氏)への応答	2011.2

まつもと しゅう
松 本 周

現職位：助教

本学への就任：2009年4月1日

最終学歴：

1996年3月 聖学院大学人文学部欧米文化学科卒業

2002年3月 東京神学大学神学部神学科卒業

2004年3月 東京神学大学大学院神学研究科博士前期課程修了

2009年3月 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程修了

取得学位：

2004年3月 神学修士（東京神学大学）

2009年3月 博士(学術)(聖学院大学)

所属学会：日本キリスト教社会福祉学会(2002年～)、日本基督教学会(2002年～)、学校伝道研究会(2005年～)、日本ピューリタニズム学会(2005年～)、日本臨床死生学会(2010年～)

学生指導：大学院生のチューター

専門分野：組織神学

研究テーマ：キリスト教社会倫理、近現代キリスト教史（特に日本）

研究内容：日本プロテスタント史における〈祈り〉の受容と変容の問題、被爆思想の宗教学的的研究

研究業績(2010年度(2010/4～2011/3))

下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
Bb 学術論文	戦後日本とキリスト教—ピューリタニズム社会倫理の視点から	『キリスト教と諸学』vol.25(聖学院キリスト教センター発行)	日本国憲法による社会構造とキリスト教社会倫理の関係について論じた。	2010.3
Bb 学術論文	祈り・志・霊性—植村正久の理解をめぐって	『聖学院大学総合研究所紀要』No.49	植村正久の「志」理解について、彼のキリスト教人間観との関わりから論じた。	2011.1
D 報告	友情のくさを繋ぐ	「教団新報」4710・11合併号(日本基督教団)	アジアキリスト教教育基金(ACEF)20周年記念講演会の報告	2010.12
D 報告	懸案の救援対策基金設置を議決	「教団新報」4715号(日本基督教団)	基金設置の経緯と意義、課題について報告	2011.1
D 報告	日韓教会交流史研究会	『聖学院大学総合研究所Newsletter』vol.20-5	韓国・長老会神学大学と聖学院大学との共同研究の第一回研究会について報告	2011.3
F 学会発表	癒しの現代—〈ニーバーの祈り〉をめぐって	日本キリスト教社会福祉学会	〈ニーバーの祈り〉の有するスピリチュアリティの諸相を分析した。	2010.6
F 学会発表	人格の根源にある祈り—植村正久の理解をめぐって	日本基督教学会	植村正久の祈り理解を〈人格性〉の特徴から述べた。	2010.9
F 学会発表	永井隆の被爆思想と死生学—『犠牲』観念をめぐって	日本臨床死生学会	永井隆の思想と死生学との架橋可能性について発表した。	2010.12

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
F 発題 コメント	「1910年までの日本側から見た日韓キリスト教交流」をめぐって	韓国・長老会神学大学、聖学院大学総合研究所「日韓教会交流史」第1回研究会	「1910年までの日本側から見た日韓キリスト教交流」(原誠氏)への応答	2011.2

ジャスティン ナイティンゲール

Justin Nightingale

現職位：特任講師

本学への就任：2007年4月1日

最終学歴：

1999年5月 University of North London

取得学位：

1999年5月 Computer Science (University of North London)

2001年4月 RSA CELTA Cambridge Certificate for Teaching ESL

担当科目：Seigakuin Primary School English Education

専門分野：English Education and Computer Science

研究テーマ：Early English Education

研究内容：Early English education, especially improving reading ability.

研究業績 (2010年度〈2010/4～2011/3〉)

下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
	iPad vs Paper	授業での実践	Using an iPad in the classroom for teaching and recording information instead of pen and paper.	2010/4
	Student Information Database	授業での実践	Experimenting with putting students' details on a computer database.	2011/3

きむらみさと 木村美里

現職位：特任研究員

本学への就任：2009年4月1日

最終学歴：

2001年3月 聖学院大学文学部欧米文化学科 卒業

2005年4月 Anglia Ruskin University MA in European Language and Intercultural Studies修了

2008年3月 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科 修了

取得学位：

2001年3月 人文学学士(聖学院大学)

2005年4月 Master of Arts (Anglia Ruskin University)

2008年3月 博士(学術)(聖学院大学大学院)

所属学会：日本比較文化学会(2009年～)、日本ビューリタニズム学会(2009年～、事務局幹事(2009年6月～))、比較思想学会(2010年5月～)、財団法人 緑の地球防衛基金 評議員(2010年11月～)

担当科目：大学院コロキウム(進行補助)

学生指導：大学院生のチューター

専門分野：思想史、比較文化研究

研究テーマ：環境保護における思想と実践、日英比較文化

研究内容：オクタヴィア・ヒルおよびナショナル・トラスト研究、理想実現における日英の比較

研究業績(2010年度〈2010/4～2011/3〉)

下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
Ba 学術論文	「心の琴線に触れる美しい環境への一考察—オクタヴィア・ヒルとカール協会—」	『比較文化研究』No.95 日本比較文化学会	オクタヴィア・ヒルの思想と彼女が関わったカール協会についての考察	2011.1
Bb 学術論文	「人々の関係をつ結びつける失われた鎖—19世紀英国の女性社会改良家の活動を手がかりに—」	『聖学院大学総合研究所紀要』No.49 聖学院大学総合研究所	オクタヴィア・ヒルとエレン・ランヤードの思想及び活動に関する比較考察	2011.1
D 研究ノート	「理想の風景を歩く—景観の側面からみる英国と日本—」	『聖学院大学総合研究所Newsletter』Vol.20-2 聖学院大学総合研究所	景観における日英の比較考察	2010.9

総合研究所 News

総合研究所ファカルティ・ミーティング 報告

Newsletter表紙裏の「総合研究所の活動」のなかに、「ファカルティ・ミーティング」が定期的
に開催されていることが報告されている。

総合研究所は、学部・大学院のように教授会などの教員組織を持たない。そこで専任研究職員全員が参加するファカルティ・ミーティングが、水曜日11:00から12:00までの1時間、大学院コモンルームで開催されている。学期中の他の行事のない日に限られるが、一学期に10回程度は開催している。

議題は、各研究職員の年間の「研究計画書」「研究報告書」の説明（各学期の初めと終わり、年度末）、時事的な話題（最近の出来事、話題の書籍など）についての議論、そして事務連絡などである。総合研究所は、最近の出来事について議論をするといっても、その出来事を神学的にどのように捉えるかを課題としている。それゆえ、議論は各専任研究員の専門研究分野を超えて、広がっていく。専門分野だけでなく常に問題関心を新たにし深めて置かないと議論の中に加われなくなる。専任研究員同士の質問と議論もあり、緊迫した雰

囲気生まれる時もあるが、共通の問題関心と議論の土台を育成する楽しい時間である。

2011年度は東日本大震災のために学部・大学院の学事暦は例年より大幅にずれ込んだが、ファカルティ・ミーティングは例年どおり4月20日から開始された。議論の主題は「東日本大震災をキリスト教信仰でどう捉えるか」である。第二回のミーティングでは、大木英夫所長が「キリスト新聞」4月23日付けに寄稿された「神に迫られた改革—東日本大震災」をテキストに議論した。

大地震と津波は甚大な被害をもたらし、なお復興の道筋がみえない。とくに福島原発事故は、放射能汚染が広がるばかりで、収束まで膨大な時間が掛かることが予想されている。被災地への援助、街の再興への支援は、速やかになされるとしても、この復興の道筋の見えない中で、心の復興、信仰の復興はどのようになされるのか、などが議論されている。

その議論の中から、シンポジウム「東日本大震災を神学的にどのように受け止めるか」を2011年10月28日に開催することも決まった。

なおファカルティ・ミーティングでは、今後もこの議論を継続させていくことになっている。

スピリチュアルケア研究講演会
スピリチュアル・コミュニケーション
～生きる支え～
実施結果—アンケート集計結果の概要—

林章敏先生は聖路加国際病院ホスピスの医師として終末期の患者さんのケアに関わっています。ホスピスの患者さんは身体的苦痛、精神的苦痛、社会的苦痛、スピリチュアル・ペインをもっていると言われています。林先生は身体的苦痛の緩和は、勿論、患者さんのスピリチュアルな痛みに積極的に関わって、患者さんのいのちを支えています。ホスピスのケアとは何かを一緒に考えてみましょう。

日時 2011年6月3日(金)14:00～16:30

場所 聖学院大学ヴェリタス館教授会室

【プログラム】

主催者挨拶 阿久戸光晴(聖学院大学理事長・学長)

講師紹介 窪寺俊之(聖学院大学大学院教授)

講演 「スピリチュアル・コミュニケーション～生きる支え～」
林 章敏(聖路加国際病院緩和ケア科医長)

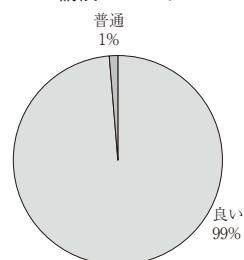
質疑応答

閉会あいさつ

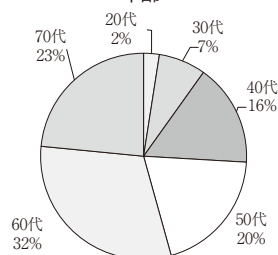
【結果の概要】

- ・参加者の人数は128名内、アンケート回答者は82名。
- ・講演について、「良い」という意見が99%と高い評価を得た。
- ・自由意見は、「大変わかりやすい講演だった」「大変勉強になった」「コミュニケーションの大切さを認識した」「またこのような講演の開催を希望する」など。

講演について

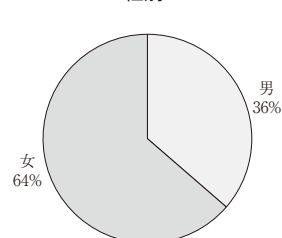


年齢



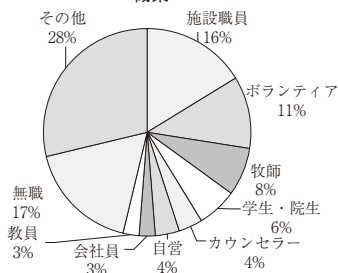
*回答者の年齢は、60代が最も多く32%、次に70代23%だった。

性別

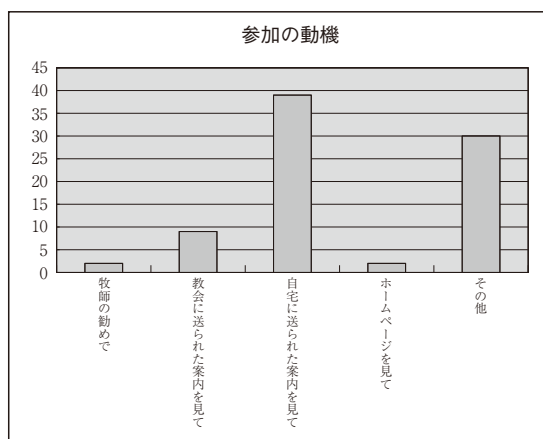


*性別は、女性64%、男性36%となった。

職業



*職業別には、「無職」が最も多く17%、次に「施設職員」16%。「その他」の内容は、「看護師」「伝道師」「ヘルパー」「介護福祉士」「チャプレン」など。



*参加の動機としては、「自宅に送られた案内を見て」が最も多かった。「その他」の内容は、「広報誌を見て」「大学内のチラシで知って」「朝日新聞を見て」「友人の勧め」。

リクエスト

- ・施設入居者（老人福祉）に対する接し方、スピリチュアルケアのあり方。
- ・「リビングウィルの冊子」について、詳しくお聞きしたい。
- ・緩和ケアにおける傾聴の意義。
- ・教会の中での牧会カウンセリング（魂の配慮）の理論と実務。
- ・平穏死という考え方について。
- ・被災者のスピリチュアルケアについて。
- ・医者・看護師等、医療提供者以外のMSW（メディカル・ソーシャルワーカー）やCP-PSW（臨床心理士—精神保健福祉士）の方の関わりを伺いたい。
- ・石丸昌彦先生。
- ・中井英夫さん。
- ・細谷亮太さん。
- ・平山正実先生。
- ・沼野尚美さん。

自由意見

- ・現在、在日外国人の生活支援のボランティアをしています。そのときの対応や相談を受けている時の対応にとっても役立つヒントをたくさん得られました。ありがとうございました。
- ・県立がんセンターの緩和ケア病棟のデイサービスボランティアになって2年目。見習い中ではほとんど患者さんやご家族の方とお話する機会はありません。とても困難を感じています。いつの日か直接的にお役に立てればと願っております。先生のおっしゃることは、頭では理解できるのですが、実践になると自信がありません。当面は人間力をみがいて、来るべき時に備えたいと思います。本日は貴重なお話をどうもありがとうございました。参考にさせていただきたいと思います。
- ・仕事でも緩和ケアに興味があり、院内の勉強会にも参加している。今回は特に聖路加のDr.ということで、楽しみにしていました。ありがとうございました。
- ・私の所属する、宮原キリスト教会には聖学院の学生が礼拝、集会に参加されています。今後、聖学院大学とキリスト教会のパイプ役（コーディネート）の支援を行いたいと考えています。
- ・主催者ご挨拶の阿久戸学長の今回の東日本大震災に関する三つ（地・拷・下）からの人間への警告、メッセージは良かった。林先生の講演も内容が具体的で分かりやすかった。「存在」の意義を改めて感じました。
- ・本当に素晴らしいお話でした。自分は勿論のこと、周囲の人たちにもこの心を広げていきたいと思っています。本日は本当にありがとうございました。
- ・とても穏やかなお顔とお声と話し方で、心地よく、わかりやすく聞けました。父が80歳になり、今は元気ですが、いつか訪れる「みとり」のことを学んだり、考えたりしたいと思っています。聖路加国際病院はテレビや本などをみていて、懂れています。その先生のお話を直接うかがえ（入院のことも）本当に良かったです。
- ・わかりやすく、先生の人徳が伝わってくるよう

な講演でした。家族でないと引き出せない笑顔というエピソードを拝聴しながら、虐待をしていた親と子の関係ではどうなのかとちょっと哀しくなりました。そういう人も先生のような立派な先生にあって最後の時にかわってくれるといいと思います。

- ・緩和医療のお話、大変参考になりました。自分も高齢に達しました。病気ではありませんが、出来ることが次第に制限されてきて、予防のためにコミュニケーションをしっかりと保つことの重要性を学びました。「心病む人の友となろう」を旗印に電話による相談を実際に行っていますが、傾聴や相手の心に安心を与えることが、その助けになればと思って電話をとっています。今回の話を参考にこれからも対応していきたいと思います。
- ・現在、グリーフカウンセラーの勉強中であり、また、ホスピスボランティアとして病院へ行き、アロマセラピーをしていますので大変参考になりました。
- ・亡くなる直前の父との関係を振り返りながら聞かせていただきました。身体以外の痛みが父を苦しめていたことを知り、それに反して家族は身体的痛みばかり関心を払っていたことを反省しました。スピリチュアルケアは危機にある全ての人が必要とするケアだと思うので、さらに広く認知されることを願っています。すばらしい講演を聞くことができたことを感謝します。
- ・本日は貴重なお話の機会に恵まれ、大変満足の午後のひと時でした。最近のマスコミ、新聞報道でも取り上げられていますが、今後の医療体

制も国際的になり、「メディカルツーリズム」等の導入でこの世界も多様な体制が必要になると思います。日本人としてのくくり以上に万国共通の精神性が大切になってくるかと思われますので、今回はこの辺の分野にたけたゲストなどに出会えたらと思います。楽しみにしております。

- ・闘病中の者です。数年前に緩和ケア病棟で夫をみおくりしました。何日かして、御礼に伺った折、その緩和ケアの医師から何を勘違いしたのか「あんたもここへ来るんだよ」という言葉をかけられ、大変ショックを受けたことがあり、医師とは思えない言葉に今でもこういう医師がいることをお知らせしたいと思いました。一人で診ていた病棟だったので、自分の独壇場だったと思います。死を考えざるを得ない者へかける言葉ではないと思いますが、はなはだ林先生に訴えることではありませんが、医師の教育もお願いしたい。本日はありがとうございました。
- ・とても勉強になりました。心よりの感謝を申し上げます。これからの小生の奉仕に生かしていきたいと存じます。また、窪寺先生がおっしゃっていたように、日頃のコミュニケーションにこそ生かすべきものだと思います。同じような意味で子どもの時から、聖書のイエス・キリストを伝えることがいかに重要であるかを再確認させていただきました。林章敏先生のますますのご活躍、そして、聖学院大学総合研究所のご発展を心よりお祈りさせていただきます。ありがとうございました。
- ・今日は、林章敏先生の心の奥深くにしみるご講演を頂きまして、本当にありがとうございました。とても豊かな良い学びの時間と機会を頂けたことに感謝の気持ちでいっぱいです。今日うかがったお話を私の心の中で大切にしながら、これからも毎日を大切に生きていきたいと思いました。また今回のように「いのちと魂と医療と…」などのテーマの講演の開催を希望します。ありがとうございました。
- ・高齢者の介護、日常生活の支援にも非常に役立ち、参考になりました。同様のテーマは何度聞いても良いと思う。一度では、身につかない、



定員を超える128名の参加者があった

意識しなければ（心がけないと）いけないので…。

- ・スピリチュアルコミュニケーションという言葉は初めてで、新鮮な言葉に響きました。日頃からスピリチュアルコミュニケーションができるから考えてみたいと思いました。ありがとうございました。
- ・老人ホームで働いているのですが、「最期はここで」という方がほとんどです。今日お話をうかがい、とても現実的でコミュニケーションをとる上で、大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・コミュニケーションの基本が大変勉強になった。特に共感がお互いに共有できること。スピリチュアルケアにおける、大切な対応は日常的対人関係の中でも重要と思う。
- ・肺がん末期の弟を看取る時、本当に今日の話と同じでした。未信者でしたが、導かれ希望を持って亡くなり、喜びの顔を見ることが出来ました。ありがとうございました。
- ・コミュニケーションの大切さを認識しました。
 - 1、何かお手伝いすることはないですか？
 - 2、一番気がかりなことは何ですか？
 - 3、患者が聞いて欲しいところまで、踏み込み方として教えてくれますか？聞かせてくれますか？

講演会に参加できありがとうございました。
- ・大変分かりやすい講演で、日々、人に接する仕事や家族との関わり方を考えさせられました。ありがとうございました。
- ・介護士をしている者ですが、今回の林先生の講演を聞かせて頂き、コミュニケーションスキルの中で、傾聴、共感、感情への対応というところで、利用者との心の中の奥深くに潜んでいるものに、触れていくことが重要であるかと実感しています。それには心からの言葉掛け、言葉とコミュニケーションの重要さと大切さを痛感させていただきました。大変分かりやすい講演をありがとうございました。
- ・私も緩和ケアの仕事をしているので、先生のお話は良く分かりました。特に患者中心の医療ではなく、患者との共同医療という視点は参考に

なりました。ありがとうございました。

- ・今回のお話は終末期でのことばかりではなく、通常高齢者と関わっているときも役立つことだと思います。
- ・「申し訳ない」「ありがとう」、「迷惑をかける」と「大変さ」の違い、使い分けとても参考になった。
- ・終末期を迎える方と接する難しさを感じていますので、色々参考になりました。
- ・林先生の穏やかな話し方がとても良かった。
- ・また、こうした講演会を楽しみにしております。
- ・主題の全容がイメージでき、生活の質に貢献するものでした。
- ・大変分かりやすかったです。早速実践していきたいと思います。
- ・大変参考になりました。自分に何ができるのか？
- ・はじめの会場内の室温が低すぎて皆さん上着を着たりしていたと思います。会場内の人の様子を見ての室温調整をして頂ければと思いました。（後半は暑すぎでした）
- ・講演中、パソコンを打つ音が耳障りでした。



講演者の聖路加国際病院緩和ケア科医長 林彰敏氏

聖学院大学総合研究所 Newsletter

Vol. 21-2, 2011

2011年8月31日発行

発行人 大木 英夫

発行所 聖学院大学総合研究所

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1

TEL: 048-725-5524 FAX: 048-781-0421

e-mail: research@seigakuin-univ.ac.jp

Homepage: <http://www.seigakuin-univ.ac.jp>

聖学院大学総合研究所

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎 1-1

Tel : 048-725-5524 Fax : 078-781-0421

E-mail : research@seigakuin-univ.ac.jp

Home Page : <http://www.seigakuin-univ.ac.jp>

Seigakuin University General Research Institute

1-1, Tosaki, Ageo-shi, Saitama-ken, 362-8585 Japan

Phone : 048-725-5524 Fax : 048-781-0421

E-mail : research@seigakuin-univ.ac.jp

Home Page : <http://www.seigakuin-univ.ac.jp>